

領域略称名：西アジア文明

領域番号：1401

平成26年度科学研究費補助金「新学術領域研究
(研究領域提案型)」に係る中間評価報告書

「現代文明の基層としての古代西アジア文明
—文明の衝突論を克服するために—」

(領域設定期間)

平成24年度～平成28年度

平成26年6月

領域代表者 (筑波大学・人文社会系・教授・常木 晃)

目 次

研究領域全体に係る事項

1. 研究領域の目的及び概要	2
2. 研究組織（公募研究を含む）と各研究項目の連携状況	4
3. 研究の進展状況	6
4. 若手研究者の育成に関する取組状況	10
5. 研究費の使用状況（設備の有効活用、研究費の効果的使用を含む）	11
6. 総括班評価者による評価	12
7. 主な研究成果（発明及び特許を含む）	15
8. 研究成果の公表の状況（主な論文等一覧、ホームページ、公開發表等）	19
9. 今後の研究領域の推進方策	25

研究領域全体に係る事項

1. 研究領域の目的及び概要（2 ページ程度）

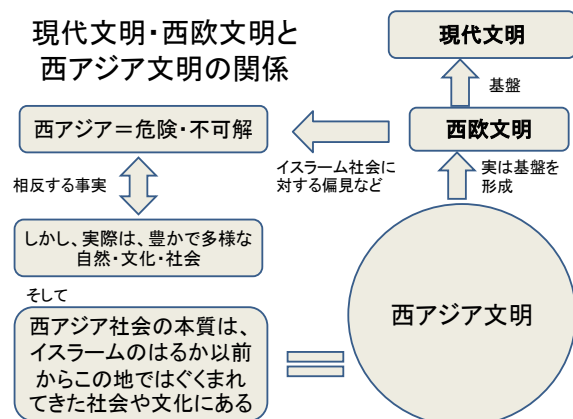
研究領域の研究目的及び全体構想について、応募時に記述した内容を簡潔に記述してください。どのような点が「我が国の学術水準の向上・強化につながる研究領域」であるか、研究の学術的背景（応募領域の着想に至った経緯、これまでの研究成果を進展させる場合にはその内容等）を中心に記述してください。

応募領域の着想に至った経緯

現代社会において、西アジア（いわゆる「中東」や「オリエント」という用語はその成り立ちからして西欧中心主義的なため、本研究領域では地理的な用語としての西アジアを用います）地域の政治、経済、文化に関する諸問題は、常に世界の不安定要素とされてきました。その背景には、西欧社会によるイスラームに対する偏見や、文明の衝突などと言う言質の中で西アジアの諸社会を西洋への対立軸として捉え、非西洋的な象徴としてスケープゴートとされてきた傾向が排除しきれません。現代政治に極めて大きな影響を与えてきたサミュエル・ハンティントンの『文明の衝突 The Clash of Civilizations』（1996）では、ソ連崩壊後の世界の紛争が国家間の抗争から文明間の衝突へと変化し、世界は行き詰ると分析しています。人々は人為的な国境や国旗に従うよりも、自己のアイデンティティに基づいた自身の属する文化や文明に結集するというのです。そのもとも激しい対立軸が西欧対イスラームでした。しかし、文化や文明を視座としたときに、両者は果たして本当に対立的なのでしょうか。

わが国においても、主として欧米というフィルターを通してこの地域が理解され、中東やイスラームという言葉を知るとすぐに不可解、危険というキーワードが思い浮かぶような風潮が存在しています。本領域に関わる研究者の多くは、長年にわたってこの地域と直接かかわってきましたが、そのような風潮に大いなる違和感を抱いてきました。西アジアの自然や文化、歴史の多様性とその豊かさに日常的に触れてきたからです。そして、現在の西アジア社会の特質となっているものの多く、例えば強い血縁集団としての人々の紐帯や唯一神への深い信仰といったものが、イスラーム社会成立のはるか以前にこの地で誕生しはぐくまれてきたことが改めて確認できます。つまり、イスラーム以前の西アジア文明の理解なしに、現代のアラブ、非アラブのイスラーム社会の本質を理解することなど到底できないのです。そして西アジア文明を深く知ることにより、この文明が達成したムギ作農耕や都市社会、キリスト教など、日常の基幹食糧・物質文化から生活システム、精神生活に至るまでもが、西欧社会に広範な基盤を提供した事実突き当たります。そしてその多くが西欧社会を通じて現在のわたしたちの世界の隅々まで、広く深い影響を与えていることを知ります。古代西アジア文明を視座におくならば、西欧文明とイスラーム文明は同一の文明から出発した直近の兄弟に過ぎず、世界のその他の文明も従兄弟や又従兄弟に過ぎないのです。したがって、西アジア文明の研究は、現代イスラーム社会の理解のみならず、現代世界の根幹部分を正しく理解し相互理解を深化させていくために、極めて重要かつ必須のアイテムに他なりません。

現代文明・西欧文明と西アジア文明の関係



西アジア文明の理解は、現代社会の根幹を正しく理解し、相互理解を深化するために、きわめて重要かつ必須の課題

新たな学問領域の創造

本研究領域では、古代西アジア地域にかかわる多様な人材を組織し、大学院生などの若手研究者を巻き込みながら文理さまざまな分野からなる 13 の計画研究を同時進行させ、それに公募研究を加えて、西アジア文明学とでもいべき新たな研究領域の構築を目指しています。イスラームは無論のこと、人類の基層文化としての西アジア文明学の構築です。西アジア地域は、現生人類のアウトリカや農耕の開始、冶金術の発明、都市の形成、文字の発明、領域国家の発達、一神教の成立など、人類史の大転換の舞台であり続けました。特に紀元前 1 万年か

ら紀元前1千年紀までの約1万年間は、世界のフォアランナーとして世界史を牽引してきました。そのような歴史プロセスが、イスラームのみならず、現代のあらゆる社会へと繋がる基層文化を作り上げたのですが、残念ながらそうした事実は現代で正当に認識され評価されているとは言えません。強調されるのはむしろ、現在の西アジア地域の紛争やイスラーム社会の特異性ばかりです。私たちは、あくまでも基層文化としての西アジア文明に目を向け、西アジア各地でのフィールドワークを通じて資料を収集、研究を積み上げていくことで、その基層文化を一つ一つ解明し、その特筆すべき先進性と普遍性の根源を抽出し、総合することで、なぜ、そしてどのように西アジア文明が現代世界の基層となり得たのかについて解明していきたいと考えています。イスラーム以前の西アジア地域の先進性・普遍性を研究する学問として、本領域を通じて西アジア文明学を創造したいと強く願っています。

領域の計画研究、公募研究では、現生人類の出アフリカ問題の新たなルート追究から始め（計画研究1,4）、農耕牧畜技術の発明・展開（計画研究2,5）、冶金など工芸技術への新たな視点（計画研究3）、都市と文字の展開（計画研究6,8）、セム系言語の発達問題（計画研究7）、一神教の始まり（公募研究）まで、古代西アジアの最も重要な人類史のテーマにそれぞれ新たな視点から取り組みます。これを背後から支えるのが自然科学分野から参加する多様な計画研究群です（計画研究9～12および公募研究）。アイソトープ、地質構造、地震、石材の微細構造といった様々な研究分野を有機的に結び付けることで、西アジアの人間社会の歴史と自然環境との関連を体系づけていきます。また、様々な研究成果をフィールドである西アジア諸国に還元していく一環として、文化財の化学分析と保存を担う研究（計画研究13）も設けています。フィールドワークの実施に当たっては、これまでの西アジア各国での調査実績を生かしつつ、緊急発掘調査などの国際協力事業をも視野に入れ、大学院生やポストドクターなどの人材育成と若い活力を積極的に登用しつつ、新しい地域や研究分野も開拓したいと考えています。研究法としては考古学、歴史学、言語学などの人文科学が主体となりますが、人間生活の背景となった自然環境の復元と人々との関わりへの解明には環境科学や分析化学などの自然科学的研究法も動員します。

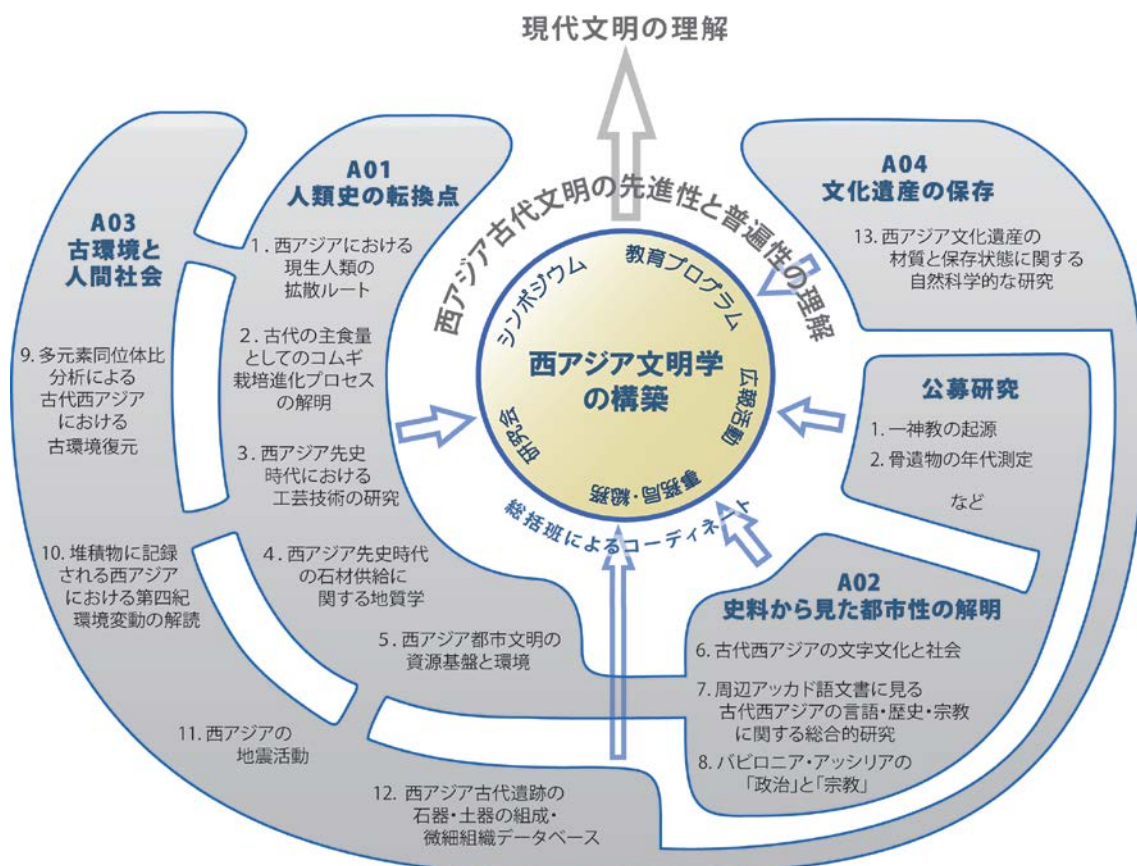
- ① 本領域では上記した各テーマを、連鎖する一連の歴史プロセスと捉え、全体に共通しかつ継続する要素を探究していきます。イスラーム以前の西アジア文明自体をダイナミックな有機体と捉えてその原動力を探究するという、これまでわが国では試みられなかった新しい研究領域の開拓を目指しています。
- ② 文明の衝突論のような一方的で政治的な思想が現代における西アジア社会の把握を困難にしている現状があります。それに対して基層文化や文明研究を積み上げることで、新たな西アジア地域像を創造し、広げていきたいと考えて本領域研究を実施しています。
- ③ 上述した個別テーマや歴史プロセスについての研究を深化させることは無論ですが、これら全体に共通する要件を明らかにします。他の文明と比較したときに、特に西アジア文明に特徴的な先進性と普遍性をもたらしたはずの要件です。領域として最も重視するのは人類史的転換がおこった人文的要件であり、歴史プロセスの中にその要件をあぶり出します。
- ④ 個々の計画研究の目的は、多様な研究者による新たな視点や手法によってそれぞれのテーマのさらなる展開を目指していますが、領域全体としては西アジア文明学という日本ではまだ謳われたことのない新たな研究領域の創成を目指しています。
- ⑤ 本領域の発展により、我が国で初めての西アジア文明を専門的に研究する拠点が誕生します。そこでは先進性と普遍性をキーワードに人類史的な転換点に関する重要テーマが文理融合型の研究によって解決が図られるとともに、研究成果を現代社会における西アジア地域理解に生かしていくような研究を目指しています。

2. 研究組織（公募研究を含む）と各研究項目の連携状況（2 ページ程度）

領域内の計画研究及び公募研究を含んだ研究組織と領域において設定している各研究項目との関係を記述し、研究組織間の連携状況について組織図や図表などを用いて具体的かつ明確に記述してください。

1) 領域内の計画研究・公募研究を含む研究組織と各研究項目との関係

本領域には A01「人類史の転換点」、A02「史料から見た都市性」、A03「古環境と人間社会」、A04「文化遺産の保存」の4つの研究項目を設けています。西アジア文明の特質はその先進性と普遍性にあり、それをもたらした歴史プロセスの形成と発展を探るために A01（計画研究 1-5）と A02（計画研究 6-8）の研究項目が設けられています。両者は、A01 が考古学や地質学、動植物考古学など物質文化に基づいて研究を行うのに対して、A02 は文献史料に依拠するという方法論の違いがあります。これらの研究項目に所属する計画研究および公募研究では、古代西アジアで最も重要な人類史の転換点にそれぞれ新たな視点から取り組みますが、一見バラバラに見えるこれらのテーマは全て先進性と普遍性という1本の糸で繋がっています。先進性とは、史上最も早くそのイベントや転換が生じたことを指し、普遍性とはイベントや転換がその地域で収束せずに世界的規模に拡散、展開したことを指します。両者が相互に深く関連しあうことはもちろんで、この連関を強く意識しつつ、A01、A02 所属の各計画研究班はそれぞれの人類史テーマの解明を進めています。現在の公募研究「古代西アジアに興った一神教の起源と展開をめぐる実証的研究」は、計画研究班が直接担えない重要な転換点の一つについて、計画研究班と協力して解明を進めています。研究項目 A03 に所属する計画研究（9-12）および公募研究「アミノ酸ラセミ化法を用いた骨遺物の年代測定」は、これら人類史の転換点となったテーマの解明を背後から支援するとともに、項目全体としては様々な研究分野を有機的に結びつけ西アジアの人間社会の歴史と自然環境との関連を体系づけていきます。自然環境が西アジア文明の特質を準備する重要な要素になっていたと考えられるからです。また、本領域のフィールドである西アジア諸国から研究資料を得るばかりでなく、研究成果を還元しその社会に貢献すべきであると考え、文化財の保存を担う研究項目 A04（計画研究 13）を設け、活動しています。



2) 領域における具体的研究内容

研究項目 A01 では、西アジアにおける現生人類の登場から初期の都市が形成されるまでの、ヒトの拡散、石器石材調達、農耕の開始、牧畜の展開、冶金術の発展といったイベント・転換を人類史上の一連の大革新と捉え、それぞれの転換プロセスをフィールドワークに基づいて実証的に研究しています。研究は包括的概括的な側面と、フィールドワークの一次資料に基づいた実証的テーマで実施しています。実証的テーマとして、ヒトの拡散については南イランでの現生人類拡散ルートに関する新仮説の検証、石器石材調達では地質調査による供給地とそのルート変化、農耕開始については形態と DNA に基づくコムギの栽培進化プロセスの解明、牧畜の展開では動物考古学的手法に同位体、DNA 分析を融合させた動物飼養プロセスの解明、冶金術ではパイロテクノロジーの視点からの考古遺物の整理分析などに取り組んでいます。

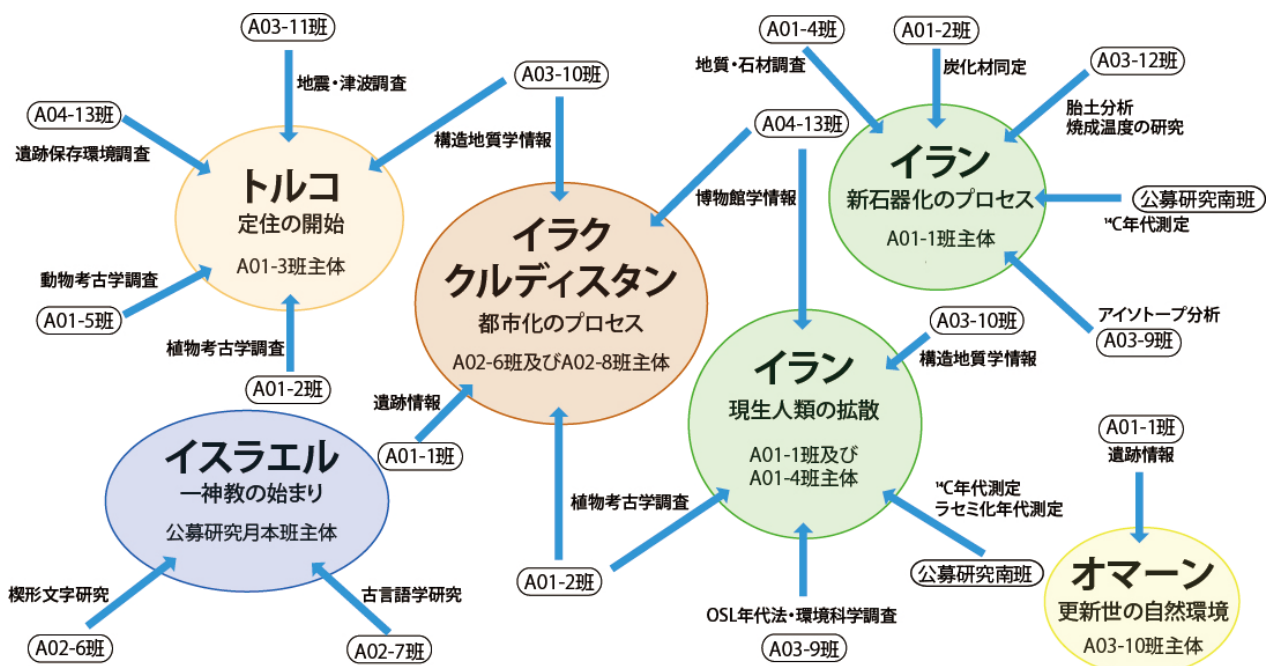
研究項目 A02 では、西アジアにおいて都市が形成され国家が発展していく中で様々に表出した都市性に焦点を絞り、文字通り楔形文書を読み解いていくことで、何がこの新しい生活様式をもたらしたのかについて具体的に追究しています。A01 と同様に包括的概括的側面と、一次史料に基づいた実証的テーマの双方に取り組んでいます。後者については、紀元前 2 千年紀ハブル川中流域の小国家の運営実態、エマル王国などユーフラテス川中流域をはじめとする周辺アッカド語文書にみる政治と宗教、バビロニアやアッシリアの国家運営にあたっての祭儀の役割などを個別テーマとしています。

研究項目 A03 では、主として A01 の各研究班と連携して資料提供を受け、自然科学的分析を実施するとともに、フィールド調査や遺跡調査を実施し、西アジアの自然環境史の構築を図っています。主な分析調査実施項目は、人骨・動物骨などの多元素同位体比分析、石器・土器などの走査型電子顕微鏡・エネルギー分散型 X 線分析、地層・遺跡探査のための地中レーダー・帯磁率異方性測定などです。

研究項目 A04 は他の研究項目と連携しつつ、西アジア諸国での文化財の理化学的研究と文化財保存事業への貢献を担っています。文化財の理化学的調査として、蛍光 X 線分析などを用いた非破壊元素分析、ELISA 法など抗原抗体反応分析や GC/WS 分析などを実施し、文化財保存のための新たな分析法の開発も行っています。

3) 各研究項目、各計画研究、各公募研究の連携状況

次の図は、現在本領域に関わり現地調査を行っている主な調査における連携状況を示したものです。この他にも、各研究班は日本国内で様々な研究連携を行っています。



3. 研究の進展状況【設定目的に照らし、研究項目又は計画研究毎に整理する】（3ページ程度）

研究期間内に何をどこまで明らかにしようとし、現在どこまで研究が進展しているのか記述してください。また、応募時に研究領域として設定した研究の対象に照らして、どのように発展したかについて研究項目又は計画研究毎に記述してください。

本研究領域で研究対象とする古代西アジア文明は、イスラームのはるか以前から存在し、ムギ作農耕や冶金術、都市社会、キリスト教など、日常の基幹食糧から技術革新、社会システム、精神生活に至るまで、現代社会の根幹を準備した極めて重要な文明でした。本領域では、古代西アジア地域がどのようにして人類史の中でも最重要となる一連の転換を成し得たのか、西アジア文明の際立った特徴である先進性と普遍性に着目してそれをもたらした要件を解明していきます。西アジア文明が達成した歴史プロセスを人文科学・自然科学からの多様な研究で解きほぐすことによって、文明の衝突論などを乗り越え、西アジア文明を基盤とした深い相互理解に基づく新たな現代文明像を構築したいと考えています。

本領域には A01「人類史の転換点」、A02「史料から見た都市性」、A03「古環境と人間社会」、A04「文化遺産の保存」の4つの研究項目を設けています。また、これら4つの研究項目を横断的に結び付けて、新たな西アジア文明研究のための西アジア文明学とでも呼ぶべき新たな学問を構築していくための原動力として総括班を設けています。古代西アジア文明研究には長大な時間が必要であり、本領域研究期間の5年間で完了するものではありませんが、研究を推進していくための研究プラットフォームづくりは完成させなければなりません。幸い、本領域研究の採択も大きな力となり、平成26年度から筑波大学に学術センターとして人文社会国際比較研究機構（Institute for Comparative Research in Human and Social Sciences=略称 ICR）が発足し、その中の比較文明史部門の中に西アジア文明研究センターが組み込まれました。この絶好の機会を逃すことなく、西アジア文明研究に関わる研究者が集う筑波大学を拠点とする利点を生かして、本領域研究を進めていくとともに、研究のためのプラットフォームを創り上げたいと考えています。以下では研究項目ごとに、現在までの研究の進展状況を記していきます。

研究項目 A01「人類史の転換点」

西アジアで興った人類史上の大変革に対して、それぞれフィールド調査を通じてアプローチしていこうとする研究を A01 項目に集めています。私たちは西アジア文明学を、現代文明社会におけるより深い相互理解に役立つ学問的アイテムと捉えています。例えば計画研究1で、現生人類が出アフリカ後に南イランで東西に分岐・拡散したという仮説を証明しようとしています。もしこれが証明されるならば、西アジアは現代に残るアジア人やヨーロッパ人を誕生させた共通の故地ということになります。また、計画研究2ではコムギ栽培の成立起源を扱いますが、現代世界の人類を支える最も重要な穀物が西アジア起源のコムギであることは厳然たる事実です。現代に続くすべての科学技術の基盤となったパイロテクノロジーの発達を扱う計画研究3や、現代人が口にする肉の多くを提供している4種の動物（ウシ・ブタ・ヒツジ・ヤギ）の家畜化過程を扱う計画研究5でも、これら重要な技術や食料は全て古代西アジアが発達させたことを明示することが重要です。

計画研究1では、南イランのアルサンジャン地区の洞窟遺跡を主対象に発掘調査を実施しており、中期旧石器時代～後期旧石器時代の良好な文化堆積が発見され多くの石器・動物骨が出土しています。ホモ・サピエンス拡散研究にとって重大な人骨がまだ発見されていませんが、人類の動態についての様々な知見が得られつつあり、特に水場遺構の発見は特筆されます。他の計画研究班（計画研究4,9）や公募研究との連携も強く、イラン政府の政治的判断に将来の調査が左右されなければ、おおむね順調に推移していると言えるでしょう。

計画研究2は、研究代表者が育児休暇を取得したため研究の進行が半年遅れています。植物考古学的手法とDNAなどを組み合わせてコムギ栽培の成立過程を追跡する重大な課題を担っています。これまでのところ、トルコ、イランなどで他の計画研究班（計画研究1,3）と連携しつつ、コムギ栽培に至る旧石器時代～新石器時代初頭の植物利用について精力的に収集しており、研究代表者の従来の研究と同様、革新的な研究成果を上げていくものと確信しています。

計画研究 3 は、現代に繋がるパイロテクノロジー技術についての総合的研究であり、研究代表者が実施しているトルコでの新石器時代の 2 遺跡の発掘調査で出土した西アジア最初期の土器や石器、プラスター製品などを資料として、実証的に研究が進められています。現代の鉄生産に連なる冶金術の始まりというテーマは極めて重要ですが、従来行われてこなかった、土器から金属器へ、またガラスへといった、材質を越えた火の制御技術の発達という視点から技術史を見直す研究が進行中です。

計画研究 4 は、都市化において家畜がどのように扱われるかを主研究テーマにしていますが、研究代表者は新石器化～都市化までの様々な時代の遺跡から出土した動物骨を研究資料として扱っており、より包括的な動物利用の歴史が復元されつつあります。特にトルコのチャヨヌ遺跡出土の動物骨に関する動物考古学的研究は、多くの研究者から注目を集めています

計画研究 5 の研究代表者は、イランとトルコにおいて地質調査を実施しており、特に旧石器時代から新石器時代にかけての石器石材の獲得の在り方などについて、地質学的・鉱物学的視点から提言を行っています。また、計画研究 1 と共同で調査している南イランの中期旧石器時代の水場遺構の珪藻分析なども実施しており、中期旧石器時代の人々の行動パターンなどに新たな研究視点を加えることに成功しています。

研究項目 A02 「史料から見た都市性の解明」

前 3000 年頃、地球上の他地域に先駆けて南メソポタミアにおいて誕生した人類初の文字システムは、精緻に発達しながら周辺に普及し、西アジアの広域に前例のない高度な文字文化世界を生み出しました。3 件の計画研究班（計画研究 6. 古代西アジアの文字文化と社会—前 2 千年紀におけるユーフラテス中流域とハブル流域 [代表：山田重郎]；計画研究 7. 周辺アッカド語文書に見る古代西アジアの言語・歴史・宗教に関する総合的研究 [代表：池田潤]；計画研究 8. バビロニア・アッシリアの「政治」と「宗教」—領土統治における神学構築と祭儀政策— [代表：柴田大輔]）からなる研究項目 A02 は、この古代西アジアの文字文化を特に前 3 - 1 千年紀のメソポタミアとシリアを中心に研究し、主として楔形文字文書史料に基づいて、言語、書記教育、暦と祭儀、政治、行政、宗教などの実相を解明しています。それぞれの計画研究における研究は順調に進展しており、成果は、研究論文の形で積極的に出版・公表されています。特筆すべきは、関連の 3 つ研究計画班が協働して実施した、前 2 千年紀シリア・メソポタミアにおける書記教育と書記伝統（行政・宗教・歴史）をテーマとした国際会議（Conference: Culture and Societies in the Middle Euphrates and Habur Areas: Scribal Education and Scribal Traditions および Emar Workshop）（平成 25 年 12 月 5-7 日 筑波大学）です。この会議には、関連する諸研究の最前線で活躍する 9 人の研究者が海外から招聘され、高度に学術的な情報共有と議論が行われました。会議で読まれたペーパーは、ドイツの出版社（Otto Harrassowitz 社）から単行本として出版されます。また、計画研究 8 は、国内の宗教学者、政治学者、イスラーム研究者を集め、シンポジウム「西アジア・北東アフリカ史における「政治」と「宗教」再考」（平成 25 年 7 月 26 日 筑波大学）を開催し、古代から現代にいたるまでの西アジアの政治と宗教の総合的理解に向けて、新しいパラダイムを模索して、果敢な挑戦を行っています。このように研究項目 A02 の各計画研究班の取り組みは、順調に進んでいると言えます。

研究項目 A03 「古環境と人間社会」

研究項目 A03 は、A01 と A02 の計画研究のテーマを背後から支援するとともに、項目全体として西アジアの古環境を復元し、歴史を自然環境との関連を体系づける役割があります。そのために、研究項目 A01、A02 の各計画研究が実施しているイランやトルコ、イラクなどでの調査により持ち帰った遺物の分析をおこなうとともに、A03 項目のメンバー自身がそれらの調査に参加し岩石や土壌サンプルを採取したり、自らが調査主体となって古環境科学調査を進めています。

計画研究 9 は、計画研究 1 による発掘調査で遺跡から出土した有機物からコラーゲンを抽出し、アイソトープ分析を行うための基礎的な研究を進めています。コラーゲン同位体分析を行うために、微量資料の炭素・窒素・硫黄同位体比分析を進めるための反応官などの改良も試みています。リン酸イオンの酸素同位体比測定用にタンタル炉を導入したことも、研究の促進に役立っています。また、計画研究 9 代表者自身もイランで調査を行っており、OSL 年代測定用の土壌サンプル採取などに大きな役割を果たしています。

計画研究 10 では、西アジアや欧米の研究者とともに、トルコ、イラン、オマーンで古環境調査を実施しました。特に、火山の爆発と遺跡の消長についてのデータを得ようと、イランでテフノクロロジーの調査をスタートさせたことが特筆されます。イラク・クルディスタンでは、メソポタミアの楔形文字文書粘土板の材質に関連する河川堆積物や河川水などについて、研究項目 A02 の計画研究班と協力して調査中であることも、その成果に期待を抱かせます。

計画研究 11 では、地殻変動が活発で多くの大地震が発生し人間活動に大きな影響を及ぼしている西アジアの地震について研究を進めています。西アジアは、アナトリアプレート、アフリカプレート、インドプレート、ユーラシアプレート、イランマイクロプレート等のプレート境界に加え、境界周辺で大規模な地震が発生してきました。複雑なテクトニクスセッティングで発生するため、大地震の断層面の形状は複雑になり、地震波形を用いて地震時に何が発生したのかを調べることは困難です。例えば、2013 年パキスタン地震 (Mw 7.7) では、アメリカ地質調査所が地震波形を用いて求めた断層すべり分布と、実際に地表で観測された断層すべり分布は大きく異なっています。同計画研究では、複雑な断層面形状を持つ地震の解析手法を開発し、本地震に適用してみた結果、地表で観測された断層すべり分布と同様に、震源から南西方向に破壊が伝播するモデルを得ることができました。

計画研究 12 は、計画研究 1 および 3 との連携で、イラン、シリア、トルコの新石器時代遺物についての SEM-EDS による研究分析を進めています。これは広いビーム面積を利用した粘土の基質部分のバルク組成を分析することができる方法で、新石器時代の土器は基本的に遺跡周辺で獲得できる粘土を素地として利用していること、900°C 以上で形成される透明柱状の焼成鉱物としてのアルカリ長石が存在することなどを確認しています。西アジアでのごく初期の土器がこのような高温焼成され、また入念な素地の準備がなされていることが明らかになったことは、西アジア先史時代のパイロテクノロジーが非常に高度であったことを意味しており、西アジアの先進性を伝える新たな資料となっています。

領域開始当初より、A03 に帰属する各研究計画班は、他の研究項目の計画研究班と非常によく連携が取れていると評価することができます。

研究項目 A04 「文化遺産の保存」

研究項目 A04 は、マクロ、ミクロな視点から、西アジアの文化遺産（彩色文化財：壁画や先史時代の青色アパタイトビーズをはじめとする考古資料）の製作技法、材料、保存状態について明らかにすることを目的として設定しています。おもに 3 つの項目に研究テーマを設定しました。

1. 製作技法、材料 (1)：遺跡現地における非破壊元素分析、微小サンプルを用いたラボでの分析。発色機構や個別の劣化機構の解明のために、SPring8 や KEK 等の XRD, XAFS, FTIR を活用し、微小部分の物質、状態を明らかにし、復元実験等をおこなう。

このテーマでは、計画研究 12 と連携し、テル・エル・ケルク遺跡の土器新石器時代中葉から後葉 (6500~5800 cal BC) の層から出土した青色ビーズ 3 点を対象に、その発色機構を明らかにするため XAFS 測定を行ない、ビーズの基材が生物由来のフルオロアパタイトであり、青色の発色には Mn が関与していることを確認しています。

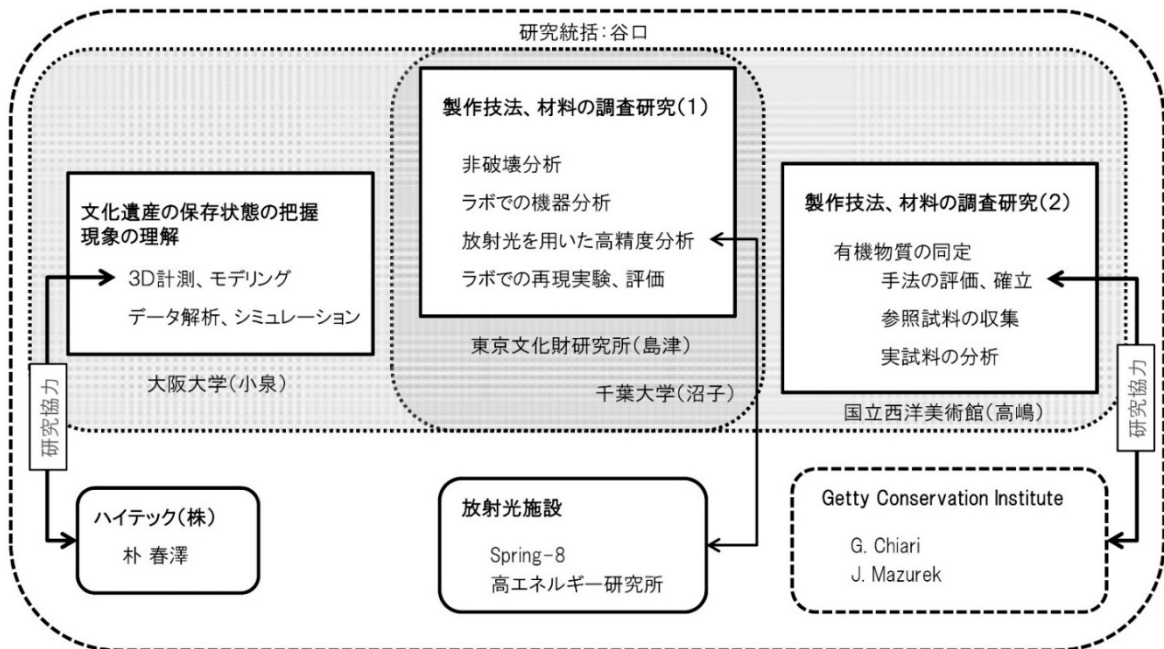
2. 製作技法、材料 (2)：有機物の分析手法の確立と実践。日本国内で ELISA をはじめとする抗体分析や

GCMS による有機物質の同定のための基盤整備。参照試料の収集、GCI との協力による情報交換、多様な手法を利用したクロスチェックを行う。

Getty Conservation Institute (GCI)、奈良女子大学と連携し、ELISA 法と、MALDI 法を利用したタンパク質の動物種の同定について手法の確立のための国際シンポジウム、ワークショップ、共同研究を実施しています。その手法を利用して、エジプト出土の博物館収蔵資料を対象に二つの方法を比較検討しながら分析を実施し、膠に利用されている動物コラーゲンが牛であることを明らかにしました。同じく、中央アジアや南アジアの試料や画材として販売されている各種の膠着材を対象に分析を実施しています。

3. 遺跡における文化遺産の保存状態の把握、現象の理解

具体的には、トルコ・カッパドキア遺跡の岩窟や壁画、周辺の地形の変容の事例を、詳細な形状 3D、微小環境解析等から、遺跡が登場した当初から現在までの履歴をシミュレーションするとともに、上記のマイクロな物質の変化の分析結果、とくに凍結融解による凝灰岩の風化程度と関連づけて検討することを目的としています。2013 年 9 月に現地から岩石試料を入手し、国内での予備実験、物性試験等を先行して実施しています。



研究項目 A04 の研究組織

4. 若手研究者の育成に係る取組状況（1 ページ程度）

領域内の若手研究者の育成に係る取組状況について記述してください。

本領域に関わる全ての計画研究、公募研究に、研究協力者として大学院生、ポスドククラスの若手研究者が参加しています。教育プログラムを用意して、それぞれの研究に参加した若手研究者が、修士論文や博士論文のテーマをその中に見出せるように個別に指導しているとともに、全計画研究を横断した形で若手研究者名簿を作成・交換し、フィールドワークに他分野の若手研究者が参加することを強力に後押ししています。現在最もコアとなる若手研究者（シンポジウム・研究会にはほぼ毎回参加しているポスドク・大学院生・学生）は 34 名に達しており、その周辺にはさらに多くの若手研究者が存在しています。西アジアでのフィールドワークや国内外でのシンポジウム、研究会に単に参加するだけでなく、積極的に研究発表を行っています。

本領域が主催した研究集会・ニュースレターでの若手研究者の研究発表例

- ・平成 24 年 10 月 19 日 2012 年度 第 1 回定例研究会 於：筑波大学人文社会学系棟 A
サーリ・ジャンモ（シリア、アレppo大学大学院）「シリア文化財の破壊と現状」
- ・平成 25 年 2 月 21 日 2012 年度第 3 回定例研究会 於：筑波大学総合研究 B 棟
伊藤 早苗（ヘルシンキ大学）『我は大洪水以前の石板に刻まれた楔形文字を調べた』紀元前 7 世紀アッシリア皇帝アッシュルバニパルの書簡
- ・平成 25 年 6 月 5 日 Workshop : Consideration for the Dead: Studies from the Neolithic Cemetery at Tell el-Kerkh 於：筑波大学プロジェクト研究棟
Sari Jammo (University of Tsukuba) “Grave Goods -Beads-”
Yuko Miyauchi (University of Tsukuba) “Buried Together”
- ・平成 26 年 1 月 28 日 Workshop “The Olive Oil Production in the Ancient East Mediterranean” 於：筑波大学プロジェクト研究棟
Takuzo Onozuka (University of Tsukuba) “Olive Oil Production in the Bronze Age and Iron Age Southern Levant”
- ・平成 26 年 2 月 10 日、11 日 シンポジウム“The First Farming Village in Northeast Iran and Turan: Tappeh Sang-e Chakhmaq and Beyond”
於：筑波大学総合研究棟 A、筑波大学総合研究棟 B
Yuko Miyauchi (University of Tsukuba) “Children at Tappeh Sang-e Chakhmaq”
- ・小野塚拓造「テル・レヘシュ第 7 次発掘調査」『現代文明の基層としての古代西アジア文明 ニュース・レター』vol.3, 16-19 頁

5. 研究費の使用状況（設備の有効活用、研究費の効果的使用を含む）（1ページ程度）

領域研究を行う上で設備等（研究領域内で共有する設備・装置の購入・開発・運用・実験資料・資材の提供など）の活用状況や研究費の効果的使用について総括班研究課題の活動状況と併せて記述してください。

本領域に属する各計画研究で購入した主な高額な設備（50万円以上）は以下の通りです。

計画研究2：微量高速遠心機（TN130610-M）、自動核酸抽出器（マルコム社 YN1300509）

計画研究9：X線CT装置（エックスレイプレシジョン・RB0X-3000T）、フーリエ変換赤外分光光度計（島津製作所・IRAffinity-1）、超純水製造装置（日本ミリポア・Mill-Q Integra11）、タンタル炉（有）堀口鉄工所 TH-250T・TC-250E

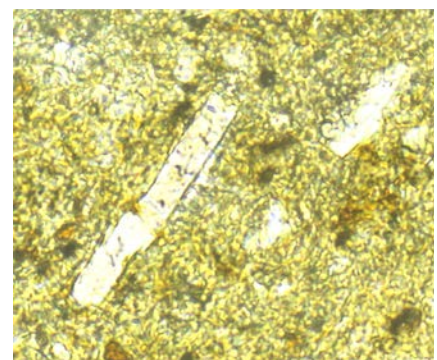
計画研究10：帯磁率異方性測定器（AGICO製 MFK1-FA）、地下レーダー探査用品（加国S&S社 pEPRO Control Package）、カソードルミネッセンス検出器システム（サンヨー電子(株) SSM-7CLS）、携帯式掘削機（Shaw Tool）、走査電子顕微鏡PCアップグレード（(株)日立ハイテク S-3000N形走査電子顕微鏡用）

計画研究12：低真空分析走査電子顕微鏡装置（日本電子（株）製 JSM-6010La）、オートカーボンコーター（日本電子（株）製 JEC-560）

計画研究13：可搬型ハンドヘルド蛍光エックス線装置 Niton XL3t（サーモサイエンティフィック社製）、蛍光観察用ファイバ光源セット HGLGPS-SET-D（オリンパス）

設備の大部分は研究項目A03の計画研究班が購入していますが、同研究項目は、A01、A02の計画研究のテーマを背後から支援するとともに、項目全体として西アジアの古環境を復元し、歴史を自然環境との関連を体系づける役割があります。これらの装置の多くは、A01の計画研究班が調査で採取した遺物を分析していますが、A03の計画研究班が自ら自然環境調査を行い、岩石、土壌サンプルなどを採取して、人間と自然環境の関係の考察に当たっています。実際に、A01、A02項目の計画研究班と連携し、トルコ、イラン、イラク、オマーンで環境調査を実施していますが、その際、帯磁率異方性測定器や地下レーダー探査器、携帯式掘削機、可搬型ハンドヘルド蛍光エックス線装置などの機器が活用されました。また、資料の一部を現地政府の許可を得て日本へ持ち帰り、X線CTやフーリエ変換赤外線分光光度計によって化石資料の内部構造の把握、走査電子顕微鏡、低真空走査電子顕微鏡などを活用して、遺物の原産地同定や形成技法の研究が進展しています。化石資料の微細構造は、アイソトープ分析の前段階調査として行われています。アイソトープ分析では、先史時代の食性や親族関係などが調査されています。また、新石器時代の土器の低真空走査電子顕微鏡調査では、西アジアではその出現当初より土器の素地が入念に準備されるとともに900-1000℃という非常に高温に温度管理されて製作されていたことが判明しています。これは冶金術が早期に発達するための高度なパイロテクノロジーとして、西アジアの先進性を語る重大な証拠が提示されたこととなります。研究項目A04では文化財の保存に役立てることを視野に、遺跡や遺物の理化学的分析を進めています。これには可搬性ハンドヘルド蛍光X線装置が活用されています。また、SPring8等での詳細な分析の前に資料を非破壊でキャラクターゼーションするためにも利用されています。黒曜石、土器、ガラス、青銅器、壁画顔料等の分析も行われました。

このような設備の多くは筑波大学に集中しており、総括班の調整のもとに、各計画研究班が協力し合い有効利用されています。総括班、研究項目間で分析アイデアを出し合って新たな分析が始まるなど、非常に有効に研究に活用されていると断言できます。



低真空走査電子顕微鏡で観察された高温焼成の証拠（イラン新石器土器中の焼成鉱物＝アルカリ長石）

6. 総括班評価者による評価（2ページ程度）

総括班評価者による評価体制や研究領域に対する評価コメントを記述してください。

本研究領域には領域スタート当初より次の4名の外部評価委員をおいています。

西藤清秀（奈良県立橿原考古学研究所副所長・現在は特任研究員）主に研究項目 A01 および領域全般の評価

前川和也（国士舘大学 21 世紀アジア学部教授・現在は京都大学名誉教授）主に研究項目 A02 の評価

宮下純夫（新潟大学自然科学研究科教授・現在は新潟大学名誉教授）主に研究項目 A03 の評価

Timothy Harrison（カナダ・トロント大学中近東文明学部教授）領域全般の評価

今回の中間評価に当たり、西藤委員・前川委員に文書で評価を寄せていただくとともに、Harrison 委員には領域代表者が海外の学会の際に面会し、評価を得ました。なお宮下委員の評価は時間的な問題で間に合いませんでしたのでここでは省かせていただきます。西藤・前川委員の評価は客観性を保持するため、いただいた文章をそのまま転載します。また Harrison 委員の評価は、日本語訳にあたり、要点のみごく簡単に書き留めました。

西藤清秀委員の評価書

1. 領域研究全体の目的・概要についての意見

我々が現在生きる基盤となる政治、社会、経済、文化システムがあたかも欧米が生み出したシステムであるかのように誤解され、世界に紹介されたと言える。それゆえ、この研究領域の主題である古代西アジア文明の基層の理解は、欧米社会が創り出した誤解を解く大きな意味を持っている。西アジアの真の姿を忠実に再現することが今必要であり、それを可能にし得るのは、宗教的正義心や歴史の正当性を大義名分とする欧米の研究者ではなく、中立的な日本人研究者であると思われる。その意味で広範囲な分野の個別研究に連帯性を持たせて西アジア文明学を確立しようという目的は時勢に合うものである。

また、西アジアの一地域の総合的研究は従来から存在するが、今回の領域研究は、地域総合研究を超え、西アジアの基層とも言うべき人、食、社会、自然を根底から見つめ直す研究であると言える。

2. 各研究項目の目的・概要・構成についての意見

研究項目は、多岐に亘るが、大きくは西アジアからの人類の拡散や食糧獲得を世界に問う新たな研究、さらに世界に後塵を配してきた楔形文書研究を日本調査隊による楔形文書の発見によって西アジアの都市性に新たな展開をもたらす研究、それらの研究を支えるべく西アジアの自然環境の仔細な情報収集と復元をおこなう研究、そして西アジアの優位性を示す文化遺産の継承を手助けする研究であり、それらが相互に絡み合わせられることによって、西アジアの持つ独自性と先進性を再発見するのが目的とする研究と言える。

3. 研究の進捗状況についての評価・感想。

「人類史の転換点」にかかわる研究は5研究からなり、その中でコムギを中心とする植物利用研究が停滞しているが、ホモ・サピエンスの拡散研究を目的とした南イランの洞窟遺跡の調査では人にとって重要な水を利用する遺構である水場遺構を検出しており、洞窟居住人の水に対する行動を復元する有力な材料を入手したと言える。

パイロテクノロジーに関わる研究では火力制御技術についての研究が進行していることは技術史の再考を予見させるものがある。また動物利用に関わる研究では着実に資料の集積が図られており、今後に期待できる。人と資源との関わりを地質学的に捉える研究もまた資料収集の段階であるが、石器石材の獲得のあり方など地質学から考古学への提言をおこなっている。

「史料から見た都市性の解明」に関わる研究は3研究からなり、文字文化世界からの地域性、時代性、さら

に文字から見た政治や宗教についての総合的理解に向け、世界からその分野の第一人者を招聘し、情報交換をおこない研究の進展を図っており、当初の目的に向かって順調に研究を進めている。

「古環境と人間社会」に関わる研究では火山の爆発と遺跡の消長に関わる研究、出土有機物からのコラーゲンを抽出しアイソトープ分析をおこなう研究、古代地震痕跡と遺跡の消長に関わる研究、土器に含まれる鉱物の組成分析研究の4研究からなるが、これらの研究は「人類史の転換点」・「史料から見た都市性の解明」にかかわる研究のバックアップになる重要な研究であり、海外の研究者の協力を得ながら着実に資料の集積がおこなわれている。

「文化遺産の保存」に関わる研究では西アジア文化遺産の材質と保存状態について自然科学的分析を内外の組織と連携して実施し、顔料の中の油脂の同定に成功している。これは西アジアの優位性を示す文化遺産の継承に役立つと思われる。

公募研究では年代測定と一神教の社会の実態に関わる研究であるが、年代測定は骨遺物のアミノ酸から測定する新たな方法であるため、難しいところはあるが、着実な経過を歩んでいると思われる。

4. 課題・問題点

「西アジア文明学」という領域を多様な学域連携による研究を統合することによって確立することを目指しているが、まだ研究半ばという時間的な問題を考慮しても、各々の研究が単体化し過ぎ、連携がさほど認められない。さらに研究内容が重複し、特に「文化遺産の保存」で実施されている玉の製作技法の研究は「人類史の転換点」のパイロテクノロジーの研究に含まれるべきで、「文化遺産の保存」の研究では西アジアの文化遺産の優位性を示し、継承に役立つ研究がなされるべきである。

また「人類史の転換点」で大きな意味と役割を担うコムギ栽培の成立過程の研究の遅延は気になり、今後の研究の行程が示されるべきである。

前川和也委員の評価書

1. 領域研究全体

本研究は人文学諸領域（とりわけ考古学、歴史学、言語学あるいは文化財学等）のみならず、自然科学とりわけ環境諸科学の研究者も加わった古代西アジア文明にかかわる総合研究である。単一研究組織（筑波大学「西アジア文明研究センター」）を核としてこれほど多領域にわたって、関連性を保ちつつ、総合的かつ有意義なテーマのもとに諸研究が推進される例は多くなく、また欧米やイラン等の研究者との研究協力体制もきわだって緊密である。これら2点において本研究にはすこぶる高い評価が与えられるべきである。

2. 研究項目 A02

計画研究6, 7, 8は楔形文字文献研究者を核とし、聖書学、セム学、考古学研究者をくわえた前2千年紀、1千年紀西アジア諸地域にかかわる研究である。研究代表者山田重郎、柴田大輔、池田潤はいずれも国際的にすこぶる高い評価を与えられており、また国内のみならず海外の研究協力者もそれぞれの分野において指導的な役割を果たしてきており、これらの研究は大きな成果が期待される。

3. 研究の進捗状況

6, 7, 8において計画されていた研究は、ほぼ順調に進展している。とりわけ前2千年紀シリア・メソポタミアの書記伝統にかんする2013年秋国際シンポジウムは一大成果であって、成果の早期刊行が待たれる。また所属する各研究者によって、重要な業績が刊行されつつある。

4. 課題、要望

シリアにおける内戦のため、テル・タバンの文書の新出現は、文書の現地調査はもはや期待できないであろう。したがって、かわって独、仏研究者との連携がさらに密接に行われることが要望される。なお計画研究6~8に属する研究者は、原則として欧文による論文刊行という姿勢をこれまで保持してきたことで、我国の人文諸

分野研究者のなかでもきわだっている。本計画研究においてもこの原則がさらに維持されることが期待される。

Timothy Harrison 委員の評価

- ・ 領域の目指す目標は大いに期待したいし、個別研究については大いに評価している。
- ・ 考古学的研究と文献による研究、自然科学的研究のより一層の融合と相乗効果を求めたい。

7. 主な研究成果（発明及び特許を含む）[研究項目毎に計画研究・公募研究の順に整理する]

（3 ページ程度）

現在実施している新学術領域研究（公募研究含む）の研究課題を元に発表した研究成果（発明及び特許を含む）について、現在から順に発表年次をさかのぼり、図表などを用いて研究項目毎に計画研究・公募研究の順に整理し、具体的に記述してください。なお、領域内の共同研究等による研究成果についてはその旨を記述してください。

以下に記述する各計画研究、公募研究の成果は、すべて領域内の共同研究の成果です。

研究項目 A01「人類史の転換点」

計画研究 1「西アジアにおける現生人類の拡散ルート—新仮説の検証—」

本計画研究では、人類史上の最初の大きな転換点となった現生人類（ホモ・サピエンス）のアフリカからの拡散に関する新ルートとその後の現生人類の東西への拡散という課題の検証を目指しています。そのために、イラン南部アルセンジャン地区に所在する中期旧石器時代～後期旧石器時代の文化層を持つA5-3（タング・シカン）洞窟で調査を実施しています。これまで3度にわたって発掘調査を行い、中期旧石器時代の水場遺構などを発見し中期旧石器時代の人々がこれまで考えられていたよりも高度な土木作業などを行っていたことなどを明らかにしました（Tsuneki 2013, 常木他2013, Tsuneki and Hourshid 2012, Tsuneki 2012）。また、1万点以上に上る多数の石器群やウマ科の動物を中心とした多くの動物骨、またウォーターフロテーションによって植物遺存体が出土し、人々の生業や行動様式について考察する多くの資料を得ることができました。¹⁴C年代測定法やOSL年代法による後期旧石器時代層の年代測定も進行し、各層の絶対年代が得られています。

計画研究 2「古代の主食糧としてのコムギ栽培進化プロセスの解明」

本計画研究では古代コムギの基礎情報を集積し、①遺跡出土植物の同定、②DNA 分析、③圃場での栽培試験、を行い、コムギ栽培進化プロセスを明らかにしようとしています。初年度は研究代表者が育児休暇を取得したため、現在 2 年目に入ったところです。①については、デデリエ、ハッサンケイフ・ホユック、タンゲ・シカン、チャハマック、ギョイテペ、ハッジなどの諸遺跡の資料を集積、研究しています(Tanno 2014, Tanno et al. 2013)。②については、岐阜大で出土コムギの DNA 抽出を続けており、西アジアの古代遺跡ではほとんどない成功例の克服を目指しています。③に関しては、山口大学の圃場においてエンマーコムギ約 200 系統および交配分離集団について育種データを取ることに成功し、研究発表しています(Tanno 2014)。

計画研究 3「西アジア先史時代における工芸技術の研究」

計画研究代表者らが発掘調査を手がけてきたトルコ共和国のサラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡とハッサンケイフ・ホユック遺跡から出土した資料を中心にパイロテクノロジーの研究を進めています(Miyake et al 2013, Miyake 2013)。土器、石灰・石膏プラスターと銅冶金術については、西アジア新石器時代の事例を中心に資料の集成を進め、西アジアの工芸技術史の中での位置づけを明確にしました(Odaka 2013)。新石器時代初頭の遺跡であるハッサンケイフ・ホユックから出土したフリント製石器の中には、石器製作に先駆けて加熱処理をおこなっているものがあり、そうした資料についても分析をおこなっています。また、フリントの原石を遺跡近くから入手し、実際に加熱処理を再現する実験考古学的研究にも着手しました。

計画研究4「西アジア先史時代の石材供給に関する地質学」

イランに所在する先史時代遺跡の石材供給の研究を中心に、アルボルス山脈やザグロス山脈などイラン各地で地質調査を実施しています（Hisada 2014, 久田他2013）。また、南イランのネリーズオフィオライトは橄欖岩体が比較的均質なハルツバーナイト（一部ダナイト）を基本とする岩体であることを明らかにしています。トルコのアンカラメランジュでも地質調査を行ない、イランのオフィオライトとの関連性を確認しました。2月にはイラン・テヘランで開催された「第32回イランおよび第1回国際地質会議」で、本プロジェクトの研究成果を発表しています。

計画研究 5 「西アジア都市文明の資源基盤と環境」

本計画研究は終末期旧石器時代の定住化から食料生産の開始、農耕牧畜社会の確立、都市化に伴う生産集約化といった社会経済的変化に伴う、動物性資源利用の変化を明らかにすることを目的としています。現在、遺跡から出土する動物骨や魚骨の種同定や形態に関する動物考古学的な研究手法と、古 DNA や動物骨に含まれる安定同位体の分析などを組み合わせ、研究を進めています。家畜への依存度の高まりは、先土器新石器時代末に乳製品の利用が開始されたことによるところが大きいと推定され、さらに羊毛の利用開始により、ヒツジ牧畜を中心とした西アジア文明の基盤が確立したと考えられます。トルコおよびシリアの土器新石器時代～前期青銅器時代の遺跡における動物利用に関する資料により牧畜経済の発達過程を追跡しています。

研究項目 A02 「史料から見た都市性の解明」

計画研究 6 「古代西アジアの文字文化と社会—前 2 千年紀におけるユーフラテス中流域とハブル流域」

自己のハブル川流域テル・タバンの遺跡出土の粘土板文書を読み解き、ユーフラテス中流域およびハブル流域の複数の遺跡から出土する前 2 千年紀の楔形文字文書資料を広く視野に収めて、当該地域の歴史と文化を包括的に研究することが本研究の課題です(Yamada n.d., Yamada 2014, 渡辺 2013)。この研究を推進するために、第 1 回の研究会を 2013 年 12 月 5-6 日に筑波大学で開催しました。研究会のテーマは、「書記教育と書記伝統」(Cultures and Societies in the Middle Euphrates and Habur Areas in the Second Millennium BC : Scribal Education and Scribal Tradition) とし、海外から当該研究に関わる先進的な研究をおこなうイギリス、ドイツ、フランス、オランダ、アメリカ、イスラエルの研究者を招聘しています。発表をもとにした論文集を *Studia Chaburensia* シリーズ (ドイツ、Harrassowitz 社) から出版すべく、準備中です (2015 年秋出版予定)。

計画研究 7 「周辺アッカド語文書に見る古代西アジアの言語・歴史・宗教に関する総合的研究」

2013 年 12 月 7 日に Emar Workshop 2013 を開催し、「エマル文書の年代学的枠組み」をテーマとして 2 名の研究協力者 Masamichi Yamada (中央大学) と Yoram Cohen (テルアビブ大学) が研究発表を行いました(Yamada 2014, 山田 2014, Yamada 2013)。シリアの遺跡メスケネ (古代名エマル) で出土したアッカド語文書中、多数を占めるのは、各種契約書を主体とする法的文書です。これらはその形状、書法、書式および登場人物の系統の相違から、現地伝統的なシリア型と外来の影響を受けたシリア・ヒッタイト型の 2 種類に分類されます。これら文書の年代に関しては、どちらも前 13-12 世紀初期とする理解が従来一般的でしたが、シリア型を前 1380-1250 年頃、シリア・ヒッタイト型を前 1275-1175 年頃とする説が最近提出されました。この一大論争を批判的に検討するのがワークショップの目的でした。Yamada が新しい説に批判的な立場から、Cohen が新しい説を指示する立場から発表を行いました。

計画研究 8 「バビロニア・アッシリアの「政治」と「宗教」—領土統治における神学構築と祭儀政策—」

本計画研究では、(1) 古代メソポタミアにおける「政教」研究、(2) 古代エジプトとの比較研究、(3) マクロな西アジア史全体における「政教」研究の根本的な問い直しなどを実施しています。(1) の主な成果として、前二千年紀バビロニア文書の語彙分析に基づいたバイリンガリズムと政治神学に関する研究、前二千年紀後半アッシリア行政記録の分析による王家結婚戦略ならびに地方官僚教育に関する研究などをあげることができます(Shibata n.d. Shibata 2014, Numoto et al. 2013)。(2) の特筆すべき活動は、宗教都市テーベの「政治」と「宗教」の調査、カルナク神殿におけるツタンカーメン王の建築活動と石碑記録調査 (フランス国立科学研究センター主催の国際共同研究) などがあります(Fahmy et al 2014, Kawai 2013)。(3) については、2013 年 7 月 26 日開催のシンポジウム「西アジア・北東アフリカ史における「政治」と「宗教」再考」があります。2014 年 3 月 9 日のワークショップでは羽田正を発表者として招き、よりマクロな世界史の中で「西アジア史」をどのように位置付けることができるか、いかなる可能性を持ち得るか討論しました。

研究項目 A03 「古環境と人間社会」

計画研究 9 「多元素同位体比分析による古代西アジアにおける古環境復元」

多元素同位体分析による古環境復元を目指して、1) コラーゲン同位体比分析、特に、微量資料の炭素、窒素、硫黄同位体比分析を進めるため、反応管などの改良を試み、2) リン酸イオンの酸素同位体比測定用にタンタル炉を導入しました。これらのタンタル炉導入に関する基礎データを解析し、日本質量分析学会同位体比部会研究会において研究発表を行いました。また3) Sr同位体比分析に向けて次年度からアパタイトのSr同位体比分析を始めるにあたり、分析手順の確認など前準備を行っています。さらに4) 人類の拡散、絶滅（もしくは人口低下）に関わるような環境変動を検討し、それを化学的指標で読み解くための方法を検討しました。これに関連して質量分析総合討論会や日本地質学会学術大会において研究発表を行っています (Manavi et al 2013, Itai et al. 2013)。

計画研究 10 「堆積物に記録される西アジアにおける第四紀環境変動の解読」

古環境復元のためにトルコ、イランで調査を実施しました。1) 古環境変動解明を目的としてGediz盆地での湖沼堆積物の採取、2) 石器石材供給源の特定のためのマッピング、3) 世界遺産カッパドキアの景観を形成する凝灰岩類の層序と浸食地形との関係解明を目的とした調査を行い、アンカラ大学やトルコ地質調査所との現地協力体制を整えました。詳報は、本領域ニュースレター第3号に掲載しています。11月1日から14日にはイラン・イスラーム共和国において、発掘サイトでテフクロロジーを適用する可能性を探るために、タブリーズ近郊にあるSahand火山の調査をおこないました。また、イラク・クルディスタンにおいて、メソポタミアの粘土板や河川堆積物、河川水などの試料を採取しました。ウィーンで開催された欧州地球科学連合においてセッションを招集し (Anma 2013)、地球化学会では考古学へのジルコロジーの応用について講演を行い (安間他 2013)、フィッシュトラック研究会を招集し研究成果を発表するとともに (安間 2014)、第四紀年代測定法について取材をしています。

計画研究11 「西アジアの地震活動」

西アジアは地殻変動が活発な地域であり、多くの大地震が発生し周辺の震源活動に大きな影響を及ぼしています。西アジアのプレート内地震 (プレートの内部で発生する地震) では、複雑な破壊伝播過程が存在することが知られています。本計画研究では、何故、複雑な破壊が発生するのか、その理由について迫ります。現在、複雑な断層面上の破壊を解析するための手法の開発と、2013年9月24日に発生したM7.7のパキスタン地震について遠地実体波を用いて解析を行っています。2013年パキスタン地震は、南北方向にP軸を持つ横ずれ断層が動いた地震ですが、一つの断層メカニズム解では、観測された地震波形を説明することは困難でした。一般に、横ずれ断層では、断層面の形状によって、遠地実体波の観測波形が大きく変化することが知られています。そこで、断層形状を仮定しない震源モデルで解析を行ったところ、おおむね観測された地震波形を説明しうる解を得ることができました (八木 2014、Funning et al 2014)。

計画研究12 「西アジア古代遺跡の石器・土器の組成・微細組織データベース」

西アジアの先史時代遺跡から出土した遺物について、化学的分析を行いデータベースを作成しています。例えば、東北イラン新石器時代に帰属するタペ・サンギ・チャハマック遺跡出土土器の胎土の鉱物学的特徴を明らかにするため、各時代からの土器の薄片観察およびSEM-EDS分析を行いました。SEM-EDSによる広いビーム面積を利用した粘土の基質部分のバルク組成の分析から、一連の土器がほぼ同じ粘土素材から形成された可能性が示されました。また、胎土にはアルカリ長石など焼成鉱物が観察される場合があり、また高温により熔融・分解した組織が鉱物粒子中に認められることがあります。これらの組織から、チャハマック各層からの土器は900～1000℃の温度で焼成されたと推定されました。重要な点は、この焼成温度が最下層VI層の土器でも実現されていることで、この遺跡では発展の初期から高度なパイロテクノロジーを有していたことが示唆されました (Tsuneki and Kurosawa 2014, 黒澤・常木 2013)。

研究項目 A04 「文化遺産の保存」

計画研究 13 「西アジア文化遺産の材質と保存状態に関する自然科学的な研究」

本計画研究では、西アジアの文化遺産を対象とし、製作技法、材料および保存状態について自然科学的に明らかにすることを目的としています。具体的には、筑波大学所蔵の西アジア考古資料、シリア、イラン、トルコの遺跡構造物および、カッパドキア遺跡修復事業のフィールドを対象とします。現在まで以下のような調査研究を行っています。

1. 製作技法、材料の調査研究(1) : シリア、テル・エル・ケルク遺跡出土の青色ビーズを対象として、Spring8 や高エネルギー研究所等のSR- μ XAFS, SR- μ XRD, SR- μ XRF, SR- μ FTIR を活用し、微量成分に着目して着色部分の物質、状態を分析。その結果、青色の発色機構としてMn⁵⁺の関与が明らかになりました。さらに、復元実験も開始しています(北原2012a, 2012b)。

2. 製作技法、材料の調査研究(2) : 国立西洋美術館のラボを拠点として、ELISA法やGC/MSによる有機物質の同定のための基盤形成を行っています。参照試料の収集に加え、GC/MSを利用した脂肪酸、タンパク質、多糖類の峻別と、抗体を用いたタンパク質の分析を併行して行うことにより、クロスチェックができる手法の体系化を試みています(谷口2013)。

3. 遺跡における文化遺産の保存状態の把握、現象の理解 : 西アジアの遺跡を想定して、電源のない状態で微小気象観測を効率的に実施できるようなシステムの開発、改良を国内にて実施しています。

公募研究「古代西アジアに興った一神教の起源と展開をめぐる実証的研究」

本公募研究では、①ヤハウェー神教の成立、②古代イスラエルの物質文化、③ヤハウェー神教の展開、の2つの課題解明を掲げています。①および③に関しては、文献収集とともに研究代表者による国際学会での研究発表と論文発表を行い(Tsukimoto 2014a,b)、②に関してはテル・レヘシュの調査研究を進めています。また、一神教を含めて世界の成り立ちについてのより根本的な議論についての著書も出版しました(月本2014)。現在、特に研究項目 A02 の計画研究班と共同で、精力的に一神教成立とその前史についての研究を進めています。

公募研究「アミノ酸ラセミ化法を用いた骨遺物の年代測定」

現在計画研究1で得られたイラン所在の旧石器時代の洞窟遺跡から採取した炭化物および動物骨資料について、以下の4点について研究を推進しています(Minami et al. 2013)。1) B3区4層から採取した炭化物の¹⁴C年代決定 : 資料調整を含めたトータルのバックグラウンド値を正確に見積もることで、41,900–40,600 cal BPの年代が得られました。6層以下はほぼ¹⁴C測定限界でした。2) ABOx-SC法による炭化物資料前処理 : 保存状態が悪い資料の損失を避けるため、同法で年代測定の有効性を確認しました。3) 限外ろ過法の確立。4) 動物骨資料のゼラチン抽出 : 塩酸濃度を低くし、アルカリ処理を短時間にしましたが、ゼラチン収率は非常に低く、骨資料には有機成分はほとんど残存していませんでした。そのため別の方法を模索しています。

8. 研究成果の公表の状況（主な論文等一覧、ホームページ、公開発表等）（5 ページ程度）

現在実施している新学術領域研究（公募研究含む）の研究課題を元に発表した研究成果（主な論文、書籍、ホームページ、主催シンポジウム等の状況）について具体的に記述してください。論文の場合、現在から順に発表年次をさかのぼり、計画研究・公募研究毎に順に記載し、研究代表者には二重下線、研究分担者には一重下線、連携研究者には点線の下線を付し、corresponding author には左に*印を付してください。また、一般向けのアウトリーチ活動を行った場合はその内容についても記述してください。

計画研究 1 (A01) : 西アジアにおける現生人類の拡散ルート—新仮説の検証—

【主要論文等】

- Tsuneki, A. (2014) The site of Tappeh Sang-e Chakhmaq, in Tsuneki, A. (ed.) *The First Farming Village in Northeast Iran and Turan: Tappeh Sang-e Chakhmaq and Beyond*. Research Center for West Asian Civilization, University of Tsukuba, Tsukuba, pp. 5-8.
- Tsuneki, A. (2014) “The site of Tappeh Sang-e Chakhmaq”, “Pottery and other objects”, in Tsuneki, A. (ed.) *The First Farming Village in Northeast Iran and Turan: Tappeh Sang-e Chakhmaq and Beyond*. Research Center for West Asian Civilization, University of Tsukuba, Tsukuba, pp. 13-18.
- Masuda, S., Goto, T., Iwasaki, T., Kamuro, H., Furusato, S., Ikeda, J., Tagaya, A., Minami, M., and Tsuneki, A. (2013) Tappeh Sang-e Chakhmaq: investigations of a Neolithic site in northeastern Iran, in Matthews, R. and H. Fazeli Nashli (eds.) *The Neolithisation of Iran, The Formation of New Societies*, Oxbow Books, Oxford, pp. 13-18.
- Tsuneki, A. (2013) Proto-Neolithic caves and neolithisation in the southern Zagros, in Matthews, R. and H. Fazeli Nashli (eds.) *The Neolithisation of Iran, The Formation of New Societies*. Oxbow Books, Oxford, pp. 84-96.
- Tsuneki, A. (2013) The archaeology of death in the Late Neolithic: a view from Tell el-Kerkh, in Nieuwenhuys, O. P., R. Bernbeck, P.P.M.G. Akkermans, and J. Rogasch (eds.) *Interpreting the Late Neolithic of Upper Mesopotamia*. Brepols Publishers, Turnhout, pp. 203-212.
- Tsuneki, A. and Hydar, J. (2013) Tell el-Kerkh 2010, *Chronique Archéologique en Syrie: Special Issue Documenting the Annual Excavation Reports Concerning the Archaeological Activities in Syria, Excavation Reports of 2010-2011*. The Directorate General of Antiquities and Museums, Syria, pp. 39-45.
- Tsuneki, A. (2013) Another image of complexity: the case of Tell el-Kerkh, in Nishiaki, Y., Kashima, K., and Verhoeven, M. (eds.) *Neolithic Archaeology in the Khabur Valley, Upper Mesopotamia and Beyond*. Studies in Early Near Eastern Production, Subsistence, and Environment 15, Berlin, ex oriente, pp. 188-204.
- Tsuneki, A. and Hourshid, S. (2012) Archaeological excavations at Seyed Khatoun cave (A5-3), Arsanjan township, Fars province, *Exhibition of the Newly Discovered Archaeological Finds, 2008-2011*. Tehran, National Museum, Research Center of Iranian Cultural Heritage, Handicrafts and Tourism Organization, Iranian Center for Archaeological Research, pp. 2-4, 35.
- Tsuneki, A., Mirzaei, A., and Hourshid, S. (2012) The Arsanjan project 2011-2012, *Abstracts, The 11th Annual Symposium of Iranian Archaeology*. Tehran, National Museum, Research Center of Iranian Cultural Heritage, Handicrafts and Tourism Organization, Iranian Center for Archaeological Research, pp. 33-34.
- Tsuneki, A. (2012) The Arsanjan prehistoric project and the significance of southern Iran in Human history, in Fahimi, H. and Alizadeh, K. (eds.) *Nāmvarnāmeḥ, Papers in Honour of Massoud Azarnoush*. IranNagar Publication, Tehran, pp. 19-30.
- Tsuneki, A. (2012) Tappeh Sang-e Chakhmaq and the Origin of the Jeitun Culture, *Workshop on the Archaeology of Neolithic and Early Chalcolithic / Aeneolithic Central Iran and Turan, Abstract*. Free University of Berlin, Dahlem, Berlin, pp. 39-48.

【主催シンポジウム等】

- シンポジウム：The First Farming Village in Northeast Iran and Turan: Tappeh Sang-e Chakhmaq and Beyond 2014 年 2 月 10 日, 11 日 筑波大学。
- ワークショップ：The Olive Oil Production in the Ancient East Mediterranean 2014 年 1 月 28 日 筑波大学。
- 研究会：Consideration for the Dead: Studies from the Neolithic Cemetery at Tell el-Kerkh 2013 年 6 月 5 日 筑波大学。
- シンポジウム：イランの旧石器 2013 年 4 月 21 日 筑波大学東京キャンパス文京校舎。

【アウトリーチ】

- 講演：常木晃 (2013) 「現代文明の基層としての古代西アジア文明」『取手市埋蔵文化財センター第 33 回企画展アジアの西と東：メソポタミア 8000 年と取手—蘇武コレンクション』2013 年 3 月 30 日 取手市埋蔵文化財センター。
- 記事：常木晃 (2013) 「情熱授業実況ライブ：考古学概説」『筑波大学 by AERA』(朝日新聞社)。
- テレビ取材・出演：常木晃 (2013) NHK ニュース「おはよう日本」『シリア世界遺産の危機』2013 年 6 月 21 日放映。

【ウェブサイト】

現代文明の基層としての古代西アジア文明 — 文明の衝突論を克服するために — <http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/kaken/>

計画研究 2 (A01) : 古代の主食糧としてのコムギ栽培進化プロセスの解明

【主要論文等】

- 丹野研一・石川直幸・大楠秀樹・河原太八・山根京子・鎌田英一郎・荒木英樹・高橋肇 (2014) 「マカロニコムギの国内生産をめざした有望系統の収量調査とその品質について」『日本作物学会紀事』別号 122-123 頁。
- Tanno, K. (2014) Vegetation of the Chakhmaq site based on charcoal identification. In (ed. Tsuneki A.): *The first farming village in Northeast Iran and Turan: Tappeh Sang-e Chakhmaq and beyond*. pp. 35-36.
- Tanno, K., Willcox, G., Nishiaki, Y. and Akazawa, T. (2013) Preliminary results of analyses of charred plant remains from late Natufian site of

- Dederiyeh, northwest Syria. *16th Symposium of the International Work Group for Palaeoethnobotany*, Thessaloniki, Greece, p. 172.
- Akashi, C., Tanno, K., Nishiaki, Y., and Guliyev, F. (2013) Neolithic Azerbaijan: plant remains from Shulaveri-Shomu culture. *16th Symposium of the International Work Group for Palaeoethnobotany*, Thessaloniki, Greece, p.174.
- Tanno, K., Willcox G., Muhesen S., Nishiaki Y., Kanjo Y. and Akazawa, T. (2013) Preliminary results from analyses of charred plant remains from a burnt Natufian building at Dederiyeh cave in northwest Syria: Terminal Pleistocene social changes in western Asia. In: Natufian foragers in the Levant (eds: Bar-Yosef O. and Valla F.R.). *International monographs in prehistory, archaeological series 19*. Michigan U.S.A., pp. 83- 87.

【アウトリーチ】

- 講演： Tanno, K. (2014) Morphological domestication of emmer wheat, and introduction of early maturity characteristics from emmer genetic resources into durum (エンマールコムギの栽培起源とエンマールコムギ遺伝資源からデュラムへの早生形質の導入), Durum research seminar: the first meeting in Japan. 2014年4月21日 近畿中国四国農業研究センター.
- 講義： 丹野研一 (2014) 「植物遺存体」日本西アジア考古学会・西アジア考古学連続講義『発掘現場からのメッセージ』2014年2月2日龍谷大学大
テレビ取材・出演： 丹野研一 (2013) TBS 世界ふしぎ発見 第1297回「人類最古の神殿がトルコにあった」2013年11月23日放映.

計画研究3 (A01)：西アジア先史時代における工芸技術の研究

【主要論文等】

- * 三宅裕・前田修・アブドゥセラーム・ウルチャム (2014) 「初期定住集落の姿を探る—トルコ、ハッサンケイフ・ホヌック遺跡第3次調査(2013)」『平成25年度考古学が語る古代オリエント』22-27頁 日本西アジア考古学会.
- * Miyake, Y., Maeda, O. ve M. Tağ (2013) Salat Camii Yanı Kazıları: 2004-2008. In *Kültür Varlıkları ve Müzeler Genel Müdürlüğü and Diyarbakır Müze Müdürlüğü* (eds.) *İlsu Barajı ve HES Projesi Arkeolojik Kazıları: 2004-2008 Çalışmaları*. Kültür ve Turizm Bakanlığı, Kültür Varlıkları ve Müzeler Genel Müdürlüğü, Diyarbakır, pp. 39-47.
- * Miyake, Y., Maeda, O. and M. Tağ (2013) Excavations at Salat Camii Yanı 2004-2008. In General Directorate of Cultural Heritage and Museums and Diyarbakır Museum (eds.) *The İlsu Dam and HEP Project Excavations: Season 2004-2008*. Ministry of Culture and Museums, General Directorate of Cultural Heritage and Museums, Diyarbakır, pp. 48-70.
- Miyake, Y. (2013) Salat Camii Yanı: Evcirleştirmeye gelen çöküş. *ArkeoAtlas* 8-2013: 48-53.
- Miyake, Y. (2013) Hasankef Höyük/Batman: Dicle'nin İlk Köyü. *ArkeoAtlas* 8-2013: 40-47.
- Miyake, Y. (2013) Hasankef Höyük/Batman. *ArkeoAtlas* 240: 96.
- Miyake, Y. (2013) Recent Progress in the Neolithic Investigations of the Anatolian Tigris Valley. In: *Neolithic Archaeology in the Khabur Valley, Upper Mesopotamia and Beyond*. Berlin, Ex Oriente, pp. 171-187.
- * Miyake, Y., Maeda, O., Tanno, K., Hongo, H. and C. Y. Gündem (2012) New Excavations at Hasankef Höyük: A 10th Millennium cal. BC site on the Upper Tigris, Southeast Anatolia. *Neo-Lithics* 1/2012: 3-7.
- * 三宅裕・前田修・アブドゥセラーム・ウルチャム (2013) 「初期定住集落の姿を探る—トルコ、ハッサンケイフ遺跡第2次調査(2012)」『平成24年度考古学が語る古代オリエント』26-32頁 日本西アジア考古学会.
- Odaka, T. (2013) Neolithic Pottery in the Northern Levant and Its Relations to the East. In: *Neolithic Archaeology in the Khabur Valley, Upper Mesopotamia and Beyond*. Berlin, Ex Oriente, pp. 205-217.
- 小高敬寛 (2013) 「西アジア後期新石器時代における土器研究の新動向—専門家ワークショップ「描かれる器・描く人」に参加して—」『西アジア考古学』14号 89-94頁.
- 小高敬寛 (2012) 「西アジア先史土器の装飾美 -その源泉・展開・意味」『うつわとこころ -フォーラムとデザイン』岡山市立オリエント美術館 6-13頁.

【主催シンポジウム等】

- シンポジウム：International Symposium on the Pre-Pottery Neolithic in the Upper Tigris Valley: Gusir Hoyuk and Hasankef Hoyuk. 2013年3月7日 筑波大学.

【アウトリーチ】

- テレビ取材・出演： 三宅裕 (2013) TBS 「世界ふしぎ発見！トルコ東部700キロの旅 人類最古の神殿がトルコにあった！」2013年11月23日放映.
- テレビ取材： 三宅裕 (2013) NHK 「NHKスペシャル 完全解凍！アイスマン～5000年前の男は語る～」2013年3月24日放映.
- 新聞取材： 三宅裕 (2013) Hurriyet Daily News 誌 (トルコ) 2013年8月31日.
- 新聞取材： 三宅裕 (2013) Batman Dogus 誌、Batman Gazetesi 誌 (トルコ) 2013年8月29日.

計画研究4 (A01)：西アジア先史時代の石材供給に関する地質学

【主要論文等】

- Rajabi, S., Torabi, G. and Arai, S. (2014) Oligocene crustal xenolith-bearing alkaline basalt from Jandaq area (Central Iran): *Implications for magma genesis and crustal nature*, Island Arc, (in press).
- Moghadam, H., Shafaii, Ghorbani, G., Khedr, M., Zaki, Fazlnia, N., Chiaradia, M., Eyuboglu, Y., Santosh, M., Francisco, C. Galindo, Martinez, M. Lopez, Gourgaud, A., Arai, S. (2014) Late Miocene K-rich volcanism in the Eslamieh Peninsula (Saray), NW Iran: *Implications for geodynamic evolution of the Turkish-Iranian High Plateau*. Gondwana Research (in press).
- Shafaii Moghadam, H., Khedr, M.Z., Arai, S., Stern, R. J., Ghorbani, G., Tamura, A. and Ottley, C. J. (2014) Arc-related harzburgite-dunite-chromitite complexes in the mantle section of the Sabzevar ophiolite, Iran: a model for formation of podiform chromitites. *Gondwana Research* (in press).
- Pirnia, T., Arai, S., Tamura, A., Ishimaru, S. and Torabi, G. (2014) Sr enrichment in mantle pyroxenes as a result of plagioclase alteration in lherzolite. *Lithos*, 196-197: 198-212.

- Nosouhian, N., Torabi, G. and Arai, S. (2014) Metapicrites of the Bayazeh ophiolite (Central Iran), a trace of Paleo-Tethys subduction-related mantle metasomatism. *Neues Jahrbuch für Geologie und Paläontologie Abhandlungen* 271: 1-19.
- Torabi, G. and Arai, S. (2013) Back-arc Paleo-Tethys related blueschist from Central Iran, South of Chupannan, Isfahan Province. *Petrology* 21: 393-407.
- Pirnia, T., Arai, S. and Torabi, G. (2013) A better picture of the mantle section of the Nain ophiolite inferred from detrital chromian spinel. *Journal of Geology* 121: 645-661.
- Kamata, Y., Shirouzu, A., Ueno, K., Sardud, A., Chareontitirat, T., Charusiri, P., Koike, T. and Hisada, K. (2013), Late Permian and Early to Middle Triassic radiolarians from the Hat Yai area, southern peninsular Thailand: Implications for the tectonic setting of the eastern margin of the Sibumasu Continental Block and closure timing of the Paleo-Tethys, *Marine Micropaleontology*, in press.

【アウトリーチ】

テレビ出演・監修: 久田健一郎 (2014)NHK 「これから体感! グレートネイチャー 追跡! 石油を育んだ太古の海~イラン・ザグロス山脈~」

計画研究5 (A01) : 西アジア都市文明の資源基盤と環境

【主要論文等】

- *Hongo, H. (2014) Çayönü Tepesi: Bioarchaeology. In (Smith, C. Ed.) *Encyclopedia of Global Archaeology*. Springer Reference, pp. 1188-1194.
- *Pearson, J. A., Grove, M., Özbek, M., Hongo, H. (2013) Food and social complexity at Çayönü Tepesi, southeastern Anatolia: Stable isotope evidence of differentiation in diet according to burial practice and sex in the early Neolithic. *Journal of Anthropological Archaeology* 32(2): 180-189.
- *Ottoni, C. et al and Hongo, H. (2013) Pig Domestication and Human-Mediated Dispersal in Western Eurasia Revealed through Ancient DNA and Geometric Morphometrics. *Molecular Biology and Evolution* 30 (4): 824-832.
- *Hongo, H., Omar, L., Nasu, H. and Fujii, S. (2014) Faunal Remains From Wadi Abu Tulayha: A PPNB Outpost in the Steppe-desert of Southern Jordan in B. De Cupere, V. Linseele & Sh. Hamilton-Dyer (eds), 'Archaeozoology of the Near East X. Proceedings of the Tenth International Symposium on the Archaeozoology of South-Western Asia and Adjacent Areas'. Ancient Near Eastern Studies Supplement Series 44. Leuven: Peeters Publishers, pp. 1-25.
- *Miyake, Y., Maeda, O., Tanno, K., Hongo, H. and Gündem C. Y. (2012) New Excavations at Hasankeyf Höyük: A 10th millennium cal. BC site on the Upper Tigris, Southeast Anatolia, *Neo-Lithics* 1/12: 3-7.
- *内藤裕一, 米田穰 (2012) 「化合物レベルの安定同位体分析を利用した先史時代人の食性復元」『ぶんせき』2号 73-80頁.

計画研究6 (A02) : 古代西アジアの文字文化と社会 —前2千年紀におけるユーフラテス中流域とハブル流域—

【主要論文等】

- Yamada, S. (2014) Inscriptions of Tiglath-pileser III: Chronographic-Literary Styles and the King's Portrait, *Orient* 49 : 31-50.
- 山田重郎 (2014) 「メソポタミアにおける「王の業績録」一年名と王碑文に見る王室歴史記録」柴田大輔編『月本昭男先生退職記念 献呈論文集第3巻: 楔形文字文化の世界』聖公会出版 120-146頁.
- 中田一郎 (2014) 『ハンムラビ王: 法典の制定者』(世界史リブレット 人シリーズ1) 山川出版社 全99頁.
- Watanabe, C. E. (2014) Styles of Pictorial Narratives in Assurbanipal's Reliefs, in: M. Feldman and B. Brown, eds., *Critical Approaches in Ancient Near Eastern Art*, Berlin, pp. 345-367.
- Yamada, S. (2011: Published 2013, January) An Adoption Contract from Tell Taban, the Kings of the Land of Hana, and the Hana-style Scribal Tradition, *Revue d'assyriologie et d'archéologie orientale* 105: 61-84.
- Yamada, S. (2011: Published 2013, January) Pudum Rotation List from Tell Taban and the Cultural Milieu of Tābatum in the Post-Hammurabi Period, *Revue d'assyriologie et d'archéologie orientale* 105: 137-156.
- Yamada, S. and Ziegler, N., eds. (2013) *Revue d'assyriologie et d'archéologie orientale 105 (2011, Special Issue): Mari, Tabatum and Emar: Geographical, Political and Cultural Aspects along the Middle Euphrates and Lower Habur*, Paris : 232pp.
- Numoto, H., Shibata, D. and Yamada, S. (2013) Excavations at Tell Taban: Continuity and Transition in Local Traditions at Tabatum/Tabatu during the second Millennium BC, in D. Bonatz and L. Martin eds., *100 Jahre archäologische Feldforschungen in Nordost-Syrien - eine Bilanz*, Wiesbaden, pp. 167-179.
- Nakata, I. (2011: Published 2013, January) The God Itur-Mer in the Middle Euphrates Region during the Old Babylonian Period, *Revue d'assyriologie et d'archéologie orientale* 105: 129-136.
- 中田一郎 (2013) 「メソポタミアからの手紙」『ORIENTE』47号 10-15頁.
- 渡辺千香子 (2013) 「メソポタミアの環境史: 自然観・歴史展開・文化の視点から」佐藤洋一郎・谷口正人編『イエロー・ベルトの環境史—サヘルからシルクロードへ』弘文堂 22-39頁.
- 渡辺千香子・辻彰洋 (2013) 「古代メソポタミアの粘土板とプロキシとしての珪藻分析の検討」『大阪学院大学人文自然論叢』66号 51-64頁.
- Watanabe, C. E. (2013) Review: Dur-katlimmu 2008 and Beyond, *Studia Chaburensia* Vol. 1. Otto Harrassowitz, Wiesbaden 2010, *Wiener Zeitschrift fuer die Kunde des Morgenlandes* 102 : 351-352.
- Yamada, S. (2012) "The City of Tabatum and Its Surroundings: The Organization of Power in the Post-Hammurabi Period," in G. Wilhelm (ed.), *Organisation, Representation and Symbols of Power in the Ancient Near East*, Winona Lake, pp. 589-600.
- 山田重郎 (2012) 「メソポタミアの歴史文書と旧約聖書の歴史書」『近代精神と古典解釈—伝統の崩壊と再構築』京都, 国際高等研究所 144-162頁.
- 中田一郎 (2012) 「文字はこうして生まれた: シュマント=バッセラのトークン理論」『ORIENTE』45号 15-20頁.
- Altaweel, M. and Watanabe, C. E. (2012) "Assessing the resilience of irrigation agriculture: applying a social-ecological model for understanding the mitigation of salinization," *Journal of Archeological Science*, 39/4: 1160-1171.

【主催シンポジウム等】

シンポジウム: クルド自治区 (イラク共和国) における近年の考古学的調査 2013年10月24日 筑波大学東京キャンパス文京校舎.
シンポジウム: Cultures and Societies in the Middle Euphrates and Habur Areas in the Second Millennium BC: Scribal Education and Scribal

計画研究 7 (A02) : 周辺アッカド語文書に見る古代西アジアの言語・歴史・宗教に関する総合的研究

【主要論文等】

- 池田潤 (2014) 「アッカド文字と日本文字における訓の発生」柴田大輔(編)『楔形文字文化の世界 月本明男先生退職記念献呈論集第 3 巻』聖公会出版 1-19 頁.
- 山田雅道 (2014) 「エマルにおける王権拡大と市民反乱: ズ・アシュタルティ改革の衝撃」柴田大輔(編)『楔形文字文化の世界 月本明男先生退職記念献呈論集第 3 巻』聖公会出版 41-61 頁.
- Yamada, M. (2014) The Broken Staffs: Disinheritance in Emar in the Light of the Laws of Hammurabi § 169 and the Nuzi Texts, *Orient* 49: 171-185.
- 池田潤 (2013) 「マスカン語の基礎語彙 (2)」*Studies in Ethiopian Languages* 2 : 1-8.
- Yamada, M. (2013) The Chronology of the Emar Texts Reassessed, *Orient* 48: 125-156.
- Yamada, M. (2011: Published 2013, January) The Second Military Conflict between 'Assyria' and 'Ḫatti' in the Reign of Tukulti-Ninurta I, *Revue d'assyriologie et d'archéologie orientale* 105: 199-220.
- 山田雅道 (2013) 「エマルにおける自由人としての寡婦と離縁者: *almattu-azibtu* 規定論」『オリエント』56 巻 1-15 頁.
- 永井正勝 (2013) 「表記形式と言語形式のポーカーフェース: 中エジプト語にみる文献言語研究の難しさ」『文藝言語研究』(言語篇)63 巻 53-67 頁.
- 永井正勝 (2013) 「『モスクワ・パピルス No.120』における接尾代名詞-w の表記とその環境」『一般言語学論叢』15 号, 41-71 頁.
- 和氣愛仁、永井正勝 (2013) 「RDB と CMS を用いたアノテーション付与型画像データベースシステムの構築—データ構造とインターフェイスの標準化を目指して—」『人文科学とコンピュータ』2013-CH-99-7 : 1-8 頁.
- 高橋洋成 (2013) 「聖書ヘブライ語のニファル動詞形態の歴史的発展について」『オリエント』56-2 巻 83-95 頁.
- 池田潤 (2012) 「近代言語学とヘブライ語研究: 人称活用形の時制体系を例として」池田潤ほか(編)『近代精神と古典解釈—伝統の崩壊と再構築』京都 国際高等研究所 99-114 頁.
- 山田雅道 (2012) 「エマルにおける *amīlūtu* と「世話」契約: 奴隷、要旨、債権者との比較から」『オリエント』54-1 巻 2-21 頁.
- Nagai, M. (2012) "Some Bibliographical and Graphemic Notes on the Egyptian Hieratic Papyrus 10682 in the British Museum" 『文藝言語研究』(言語篇) 62 巻 53-74 頁.
- 永井正勝・和氣愛仁 (2012) 「古代エジプト神官文字写本を対象とした言語情報表示システムの試作」『人文科学とコンピュータシンポジウム 論文集: つながるデジタルアーカイブ分野・組織・地域を越えて—』情報処理学会シンポジウムシリーズ Vol. 2012, No. 9 : 225-230.
- 永井正勝 (2012) 「文献研究で求められる基礎研究の技法: 神官文字資料を読む行為に対する言語学からの提言」吉村作治先生古稀記念論文集編集委員会[編]『永遠に生きる- 吉村作治先生古稀記念論文集-』中央公論美術出版 357-367 頁.

【主催シンポジウム等】

ワークショップ: Emar Workshop: "History and Chronology of Emar 2013 年 12 月 7 日 筑波大学.

【アウトリーチ】

講演: 池田潤 (2014) 「アッカド文字と日本文字における訓について」(日本オリエント学会 第 308 回公開講演会 2014 年 5 月 24 日
取材: 池田潤 (2013) 「情熱授業実況ライブ: 言語学概論」『筑波大学 by AERA』(朝日新聞社)

計画研究 8 (A02) : バビロニア・アッシリアの「政治」と「宗教」—領土統治における神学構築と祭儀政策—

【主要論文等】

- Shibata, D. (in press) A Diplomatic Journey of King Shalmaneser I and Prince Tukulti-Ninurta to Carchemish, in: Y. Heffron et al. (eds), *Postgate Anniversary Volume*, Eisenbrauns.
- Shibata, D. (in press) Assyrian Princesses in the Land of Māri, in: B. Düring et al. (eds), *Hegemonic Practices of the Middle Assyrian Empire*, Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten.
- Shibata, D. (in press) Die sumerischen exegetischen Epitheta des Marduk, in: M. Lang et al. (eds), *Sprachsituation und Sprachpolitik – Mehrsprachigkeit im Altertum*, Alter Orient und Altes Testament, Ugarit-Verlag, (in press)
- Shibata, D. (2014) A Note on the Bilingual Inscription of Šamaš-šumu-ukīn, *RIMB* 2, B.6.33.1, *Orient* 49 : 85-88.
- Fahmy, A. Kawai, N., & Yoshimura, S. (2014) Archaeobotany of Two Middle Kingdom Cult Chambers at North Saqqara, Egypt, in: C. J. Stevens et al. (eds), *The Archaeology of African Plant Use*, Institute of Archaeology, University College London Publication, Walnut Creek: Left Coast Press, pp. 141-149.
- Shibata, D. (2011: published in 2013) The Toponyms, 'Land of Māri', in the Late Second Millennium B.C., *Revue d'assyriologie et d'archéologie orientale* 105: 95-108
- Shibata, D. (2011: published in 2013) The Origin of the Dynasty of the Land of Māri and the City-god of Tābetu, *Revue d'assyriologie et d'archéologie orientale* 105: 165-180
- Kawai, N. (2013) Some Remarks on the Funerary Equipment from the tomb of Amenhotep III (KV 22), in: Creasman, P. P. (ed.) *Archaeological Research in the Valley of the Kings and Ancient Thebes*, Wilkinson Egyptology Series 1, Tucson: University of Arizona Egyptian Expedition, pp. 149-172.
- 吉村作治・河合望・柏木裕之・高橋寿光・山田綾乃 (2013) 「発掘調査概報」『エジプト学研究別冊: アブ・シール南丘陵遺跡第 21 次・第 22 次調査概報』19-38 頁.
- 近藤二郎・吉村作治・柏木裕之・河合望・高橋寿光 (2013) 「第 5 次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』19 号 7-120 頁.
- 河合望 (2013) 「スメンクカラー王に関する覚書」『永遠に生きる—吉村作治先生古稀記念論文集』中央公論美術出版社 119-134 頁.
- Shibata, D. (2012) Local Power in the Middle Assyrian Period: The 'Kings of the Land of Māri' in the Middle Habur Region, in G. Wilhelm (ed.), *Organization, Representation, and Symbols of Power in the Ancient Near*, Eisenbrauns, pp. 489-505.
- Kawai, N., Takahashi, K. & Yazawa, K. (2012) Middle Kingdom Pottery from the Waseda University Excavation at Northwest Saqqara

2001-2003, in: R. Schiestl (ed.) *Handbook of Pottery of the Egyptian Middle Kingdom Vol. II: Regional Volume*, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, pp. 147-160.

Abe, Y., Harimoto, R., Kikugawa, T., Yazawa, K., Nishisaka, A., Kawai, N., Yoshimura, S. and Nakai, I. (2012) Transition in the Use of Cobalt-blue Colorant in the New Kingdom of Egypt, *Journal of Archaeological Science* 39: 1793-1808.

Kawai, N. (2012) Waseda University Excavations at Northwest Saqqara, *Saqqara Newsletter* 10: 38-46.

【書籍】

柴田大輔 (編著) (2014) 『楔形文字文化の世界』 聖公会出版 222 頁.

高宮いづみ・河合望 (2014:印刷中) 『ラメセス 2 世』 世界史リブレット人 002 山川出版社.

河合望 (2012) 『ツタンカーメン 少年王の謎』 集英社 256 頁.

【主催シンポジウム等】

シンポジウム：西アジア・北東アフリカ史における「政治」と「宗教」～エジプトを舞台に～ 2013 年 7 月 26 日筑波大学.

計画研究 9 (A03)：多元素同位体比分析による古代西アジアにおける古環境復元

【主要論文等】

丸岡照幸 (2014) 「白亜紀末の大量絶滅イベントを引き起こした環境変動—地球化学からの制約—」『日本生態学会誌』 64: 63-75.

Jadhava, M., Zinner, E., Amari, S., Maruoka, T., Marhas, K., and Gallino R. (2013) Multi-element isotopic analyses of presolar graphite grains from Orgueil, *Geochimica et Cosmochimica Acta* 113: 193-224.

Itai, T., Maruoka, T., Kusakabe, M., Uesugi, K., Mitamura, M. (2013) Use of soil color meter for aqueous iron and ammonium measurements, *Soil Science and Plant Nutrition* 59: 450-454.

Goto, K. T., Y. Sekine, K. Suzuki, E. Tajika, R., Senda, T., Nozaki, R., Tada, K., Goto, S., Yamamoto, Maruoka, T., Ohkouchi N. and Ogawa, N. O. (2013) Redox conditions in the atmosphere and shallow-marine environments during the first Huronian deglaciation: Insights from Os isotopes and redox-sensitive elements, *Earth and Planetary Science Letters* 376: 145-154.

【書籍】

丸岡照幸 2013 「大量絶滅と生命の進化」『アストロバイオロジー—宇宙に生命の起源を求めて』(山岸 明彦 編) 179-191 頁.

丸岡照幸 2012 「隕石衝突と生物大量絶滅」『地球と宇宙の化学事典』(日本地球化学会 編) 33-34 頁.

【主催シンポジウム等】

学会セッション：日本地球化学会 2013 年度年会 セッション「地球化学の人文科学への応用」, セッション「地球表層水圏と生態系」 2013 年 9 月 11 日-13 日筑波大学.

学会セッション：日本地球化学会 2012 年度年会 セッション「地球化学の人文科学への応用」, セッション「地球表層水圏と生態系」 2012 年 9 月 11 日-13 日九州大学.

【アウトリーチ】

講演：丸岡照幸 (2014) 「重い水素と軽い水素—原子の重さを測って環境変動をとらえる—」 2014 年 3 月 21 日 広尾学園中学校・高等学校.

講演：丸岡照幸 (2013) 「巨大隕石が落ちると何が起きるのか」 2013 年 3 月 20 日 広尾学園中学校・高等学校.

講演：丸岡照幸 (2012) 「隕石クレーターを作ってみよう！いん石衝突と地球環境の関わり」 2012 年 10 月 5 日 東京都立小松川高等学校.

連続講座：丸岡照幸 (2012) 「化学で読み解く環境変動」平成 24 年度県民大学講座(全 10 回) 茨城県県南生涯学習センター.

計画研究 10 (A03)：堆積物に記録される西アジアにおける第四紀環境変動の解読

【主要論文等】

Yasudomi, Y., Motoyama, I., Oba, T. and Anma, R. (2014) Environmental fluctuations in the northwestern Pacific Ocean during the last interglacial period: evidence from radiolarian assemblages. *Marine Micropaleontology* 108: 1-12.

Veloso, E. E., Hayman N. W., Anma, R., Tominaga M., González R. T., Yamazaki T., and Astudillo N. (2014) Magma flow directions in the sheeted dike complex at superfast spreading mid-ocean ridges: Insights from IODP Hole 1256D, Eastern Pacific. *Geochemistry, Geophysics, Geosystems* 15 (4): 1283-1295.

Shinjoe, H., Orihashi, Y., Naranjo, J. A., Hirata, D., Hasenaka, T., Fukuoka, T., Sano, T. and Anma, R. (2013) Boron and other trace element composition of the Quaternary volcanic rocks from the Southern Volcanic Zone in Andean Arc: Implication for the slab-derived component. *Geochemical Journal* 47: 185-199.

Kawamura, K., Sakaguchi, A., Strasser, M., Anma, R. and Ikeda, H. (2012) Detailed observation of topography and geologic architecture of a submarine landslide scar in a toe of an accretionary prism. in “*Submarine Mass Movements and Their Consequences*” Y. Yamada, K. Kawamura, K. Ikehara, Y. Ogawa, R. Urgeles, D. Mosher, J. Chaytor and M. Strasser (eds.), *Advances in Natural and Technological Hazards Research* vol. 31, Springer: 301-309.

【主催シンポジウム等】

シンポジウム：「西アジアの地質とテクトニクス」 2012 年 12 月 12 日 筑波大学.

計画研究 11 (A03)：西アジアの地震活動

【主要論文等】

*八木 勇治 (2014) 「震源過程インバージョンに用いるフィルターの影響」『地震』 66 (4)号 147-149 頁.

Mitsui, Y. and Yagi, Y. (2013) An Interpretation of Tsunami Earthquake Based on a Simple Dynamic Model: Failure of Shallow Megathrust Earthquake. *Geophysical Research Letters* 40: 1523-1527.

【アウトリーチ】

新聞記事：八木勇治 (2013)朝日新聞 2013年4月22日朝刊。

計画研究 12 (A03)：西アジア古代遺跡の石器・土器の組成・微細組織データベース

【主要論文等】

*黒澤正紀 (2014) 「岩石の顕微鏡観察, SEM 観察 (3章9節)」『地球環境学マニュアル 2』総合地球環境学研究所編 朝倉書店 54-55 頁。
Kurosawa, M., Şaşa, K., and Ishii, S. (2013) Comparison of calibration curves for a new and old Si (Li) detectors with different energy resolution. *Annual Report of Tandem Accelerator Center, University of Tsukuba* 82: 35-37.

計画研究 13 (A04)：西アジア文化遺産の材質と保存状態に関する自然科学的な研究

【主要論文等】

*Mazurek, J., Svoboda, M., Maish, J., Kawahara, K., Fukakusa, S., Nakazawa, T., Taniguchi, Y., (submitted) Characterization of binding media in Egyptian Romano portraits using enzyme-linked immunosorbant assay and mass spectrometry, *e-Preservation Science*.
*谷口 陽子・島津 美子・沼子 千弥・北原 圭祐 (2013) 「土器新石器時代テル・エル・ケルク遺跡 (シリア) 出土の XAFS によるアパタイト製青色ビーズの発色機構の解析」『平成 24 年度 SPring-8 重点産業化促進課題・一般課題 (産業分野) 実施報告書 (2012B)』公益財団法人高輝度光科学研究センターJASRI 179-184 頁。
*谷口陽子 (2013) 「油彩画」の起源と展開について—中央アジア仏教壁画の彩色技法・材料から— <色彩に関する領域横断シンポジウム> 報告 きらめく色彩とその技法 工房の実践プラクティスを問う—東西調査報告からみる色彩研究の最前線— 『大阪大谷大学文化財学科調査研究報告書 第 1 冊』大阪大谷大学文化財学科 115-141 頁。

【主催シンポジウム等】

シンポジウム：Symposium on scientific studies of organic substances in polychromed cultural heritage 2013 年 1 月 7 日 東京文化財研究所。

ワークショップ：彩色文化遺産の有機物質の分析に関するワークショップ 2013 年 1 月 8-11 日 国立西洋美術館。

研究会：西アジアにおける土器新石器時代のアパタイト製青色ビーズに関する研究会 2013 年 4 月 22 日 筑波大学。

【ウェブサイト】

筑波大学文化財の保存・活用と理化学分析リサーチユニット：http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/ru/index_1

公募研究：アミノ酸ラセミ化法を用いた骨遺物の年代測定

南雅代・坂田健・中村俊夫 (2014) 「限外ろ過法を用いた化石骨の 14C 年代測定—これまでの総括—」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』25: 164-170 頁。

Minami, M., T. Kato, Y. Miyata, T. Nakamura, and Q. Hua. (2013) Small-mass AMS radiocarbon analysis at Nagoya University, *Nuclear Inst. and Methods in Physics Research, B.* 294: 91-96.

Minami, M., K. Yamazaki, T. Omori, and T. Nakamura (2013) Radiocarbon dating of VIRI bone samples using ultrafiltration. *Nuclear Inst. and Methods in Physics Research, B.* 294: 240-245.

Minami, M., T. Nakamura, K. Sakata, M. Takigami, and T. Nagaoka (2013) Ultrafiltration pretreatment for 14C dating of fossil bones from archaeological sites in Japan, *Radiocarbon.* 55 (2-3): 481-490.

公募研究：古代西アジアに興った一神教の起源と展開をめぐる実証的研究

【主要論文等】

Tsukimoto, A. (in press) Ironie und Humor in der jahwistischen Urgeschichte, *Supplement of Vetus Testamentum, Munic Congress Volume.*

Tsukimoto, A. (in press) In the Shadow of Thy Wings; a Review of the Winged Goddess in Ancient Near Eastern Iconography. *Orbis Biblicus et Orientalis* 160: 15-31.

【書籍】

月本昭男 (2014) 『旧約聖書に見るユーモアとアイロニー』教文館 152 頁。

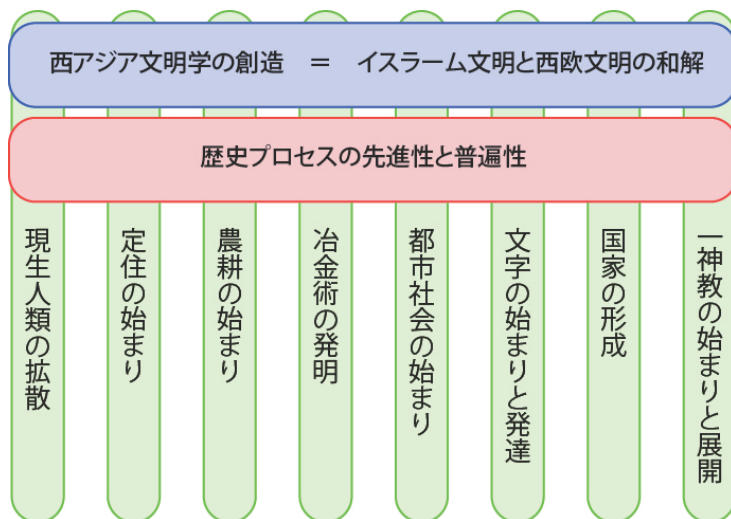
月本昭男 (2014) 『この世界の成り立ちについて：太古の文書を読む』ぶねうま舎 216 頁。

9. 今後の研究領域の推進方策（2ページ程度）

今後どのように領域研究を推進していく予定であるか、研究領域の推進方策について記述してください。また、領域研究を推進する上での問題点がある場合は、その問題点と今後の対応策についても記述してください。また、目標達成に向け、不足していると考えているスキルを有する研究者の公募班での重点的な補充や国内外の研究者との連携による組織の強化についても記述してください。

研究領域の構造

現在進行している領域は、いわば3階建ての構造になっています。実際のフィールド調査を含む人類史の大転換点を個別に研究し、なぜそのような歴史プロセスが生じたのかを探る1階部分の研究、それぞれの歴史プロセスに共通する先進性と普遍性を抽出していく2階部分の研究、そしてこの先進性と普遍性を認め、西アジア文明学を創造し、人類にとっての西アジア文明の普遍的価値を現代社会に還元していく3階部分です。もちろん1階部分に当たる各歴史プロセスの解明は長期にわたる実証課題であり、各階の研究は同時並行で進めていく必要が



あります。幸い、1階部分に当たる現生人類の拡散、定住の始まり、農耕の開始、冶金術の開始、都市の始まり、文字の始まり、領域国家の形成、一神教の始まりなどの研究は、本領域の各計画研究が精力的に取り組んでおり、フィールドもイラン、トルコ、イスラエル、オマーン、そして昨年度からはイラク・クルディスタンと、様々な地域で調査を行っています。とりわけイラク・クルディスタンは、1960年代まで、西アジアの中の新石器化や都市化研究のためのフィールドの中心地でありましたが、政治的状況からこの50年間、本格的な考古学調査が滞っていました。この5年ほど外国隊に門戸を開くようになった状況で、この西アジアで最も重要なフィールドの一つに日本隊が参入できるのは、西アジアの地域研究で欠けていたピースを繋げることを意味し、学術的に大きな意義があります。本領域から2つの計画研究がすでに参入しており、そのことは私たちにとって大きな強みとなりましょう。西アジア各地での現地調査に当たっては、領域の各班が密接に連携をとっていて、4つの研究項目間の相互乗り入れも大変活発です。

現在取り組みつつある課題=2階部分の構築

西アジアで生じた各歴史プロセスに先進性と普遍性という共通項がなぜあるのか、その研究に本格的に取り組むべき時期となっています。その飛躍のために企画したのが、2014年6月末に海外から10名の研究者を招へいして行う国際シンポジウム「西アジア文明学の創出1：今なぜ西アジア文明なのか」です。このシンポジウムでは、各計画研究の代表者がそれぞれの分野の海外の先端的な研究者とともに対話形式で各テーマについて語り合い、最後に全員で、西アジア文明の先進性と普遍性の要因について激しい議論を戦わせる予定です。このシンポジウムの成果は、日本語と英語で出版していきます。また、このシンポジウムとは別に、総括班を中心に、西アジア文明の先進性と普遍性を抽出するための連続した研究集会を開催していきます。

今後一層強化すべき課題=3階部分の構築

本領域で最も研究への取り掛かりが遅れているのが、古代西アジア文明の研究成果を現代にどのように結んでいくかという点です。古代西アジア文明を視点とした時にイスラーム文明と西欧文明が同一の文明から成立した非常に近い文明であると主張するならば、なぜ現在のイスラーム文明と西欧文明が対立的にしか可視化

されないのか、という課題に真剣に取り組まねばなりません。現在のところ本領域ではこの部分の研究は遅れていると言わざるを得ません。この問題に取り組むためには、本領域の研究代表者たちが、イスラーム史や西欧アメリカ史、国際関係論などの研究者たちと積極的に対話を始めなければならないと考えています。その中で一つの指針を示したと思われるのが、計画研究 8 を中心に 2013 年 7 月 26 日に開催されたシンポジウム「西アジア・北東アフリカ史における「政治」と「宗教」再考」です。同シンポジウムでは、ライシテ研究者（伊達聖伸）が「政治」対「宗教」という近代ヨーロッパ的な二項対立を批判的に検討し、また今後の研究可能性について論じたうえで、エジプト史古代（河合）・中世（中町信孝）・近現代（鈴木恵美）の専門家がそれぞれの研究状況の批判的総括と研究可能性を発表しました。同計画研究では同じ研究項目 A02 の計画研究と共同で 2014 年 3 月 9 日にワークショップを行ない羽田正を発表者として招き、よりマクロな世界史の中で「西アジア史」をどのように位置付けることができるか、いかなる可能性を持ち得るかについて討論しています。このように、古代西アジア研究がどのようにして現代史と関わりを持てるのかを真剣に議論する企画として、他の計画研究班、総括班ともに、国内外の多くの現代史や国際関係論の研究者の協力を得て、この 3 階部分の構築に今後真剣に取り組む必要があります。

公募班の重点的補充および国内外の研究者との連携

現在の領域研究の強みは 1 階部分に強く認められます。特に研究項目 A01, A02 の諸計画研究班および公募研究月本班が、西アジアの多様な地域においてフィールドワークに基づいた実証的な研究を現在進行形で進めていること、それに研究項目 A03 の計画研究が全面的に協力し、また自然環境的な背景の研究を独自に進めていることが特筆できる点です。総括班会議はほぼ毎月開催され、研究連携を深めています。

それに対して、2 階部分および特に 3 階部分の研究については、より一層強化を図る必要があります。そのためには総括班の研究活動をより充実させるとともに、公募研究において、特にイスラーム研究および現代西欧文明研究を視点とした古代西アジア文明に対する評価の研究、その成果に基づいてどのように両文明間の和解を図っていくのか、こうした課題の研究を求めたいと考えています。またそれを単に公募研究に求めるばかりでなく、古代西アジア文明学の構築を目指すという意味で、各研究項目、各計画研究からこのような問いに積極的関与し、このような研究状況を作る必要も強く感じています。

研究項目 A03 については、これまでは研究項目 A01-02 からの研究の要望に基づく課題がほとんどでしたが、西アジア各地の古環境の復元に関してかなりの資料が蓄積されてきています。特に火山灰や地震学などの知見を基盤として、より広域の西アジア全域あるいはそれを飛び越えた地域での古環境復元に寄与するデータとなる可能性があります。そのために、西アジアにおける海洋などを含めた広域環境変化の先験的研究（トバ火山灰や海洋海面変化の研究例など）を公募し、これまでの個別研究をまとめていく視点も必要であると考えています。

これらの研究および外部評価に、特に国外の研究者の連携と厳しい評価を求めながら、本研究領域を進めてまいります。